長 沖 古 墳 群 XIV

―久保地区D地点・第66号墳―

2014

本庄市教育委員会

長沖古墳群 XIV

―久保地区D地点・第66号墳―

2014

本庄市教育委員会

序

埼玉県の北部に位置する本庄市は、北は関東最大の河川で群馬県との県境をなす利根川から、南は秩父の峰々に連なる標高 500 m級の山々からなる上武山地まで、南北に細長い起伏の変化に富んだ地形と、緑豊かな自然環境に恵まれた大変住み良い場所であります。そのため当地域の歴史も古く、各時代に生活していた先人達の活動の痕跡である埋蔵文化財包蔵地も市内には 500 箇所以上もあり、現在のところ最も古いものは関東ローム層下の約 3 万年前の旧石器時代まで確認されています。

本書は、本庄市児玉町長沖に所在する埼玉県選定重要遺跡の長沖古墳群の中央部に位置する久保地区Ｄ地点の発掘調査の成果を記録した報告書です。

調査区内からは、ローム層下の旧石器時代の文化層、古墳時代前期の竪穴式住居跡、南側の環状 1 号線建設に伴って調査した長沖 66 号墳の周溝跡の一部などが検出され、その他に縄文時代の土器や石器の破片も出土しています。これらは、文字による記録や伝承のない有史以前の郷土の歴史や文化を物語る貴重な資料であり、これらの文化財を保存記録し、後世に残し伝えていくことが、現代を生きる我々の重要な責務の一つと言えるでしょう。

本書が、学術研究の資料としてはもとより、埋蔵文化財の理解と文化財保護の啓発・普及の一助として、多くの方々にご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地の発掘調査から報告書の刊行にあたり、文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました株式会社セブン－イレブン・ジャパンと地権者の方々や様々なご協力とご尽力を賜りました皆様に対して、心からお礼申し上げます。

平成 26 年 12 月

本庄市教育委員会

教育長　勝山　勉

例　言

1．本報告書は、埼玉県本庄市児玉町長沖 272―1、277―1・3 番地に所在する長沖古墳群久保地区Ｄ地点の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、株式会社セブン―イレブン・ジャパンの店舗建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成 26 年 5 月 19 日～同年 6 月 9 日の期間に本庄市教育委員会が実施した。
3．発掘調査の経費は、土地所有者の倉林孝一と中林　功が負担した。
4．発掘調査担当者は、本庄市教育委員会文化財保護課の恋河内昭彦と的野善行があたり、現地調査には株式会社測研文化財調査室の大塚昌彦が専従した。
5．整理作業及び報告書刊行にかかる業務は、株式会社測研に委託した。
6．本書の執筆は、第 1 章を本庄市教育委員会文化財保護課が、第 5 章をパリノ・サーベイ株式会社、それ以外を大塚が行った。
7．本書掲載の、遺構写真は大塚が、遺物写真は山崎　悟が撮影した。
8．本書の編集は、大塚が行った。
9．炭化材樹種同定及び石材目視鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
10. 発掘調査・整理調査及び報告書刊行に至るまで、以下の方々からご協力・ご指導をいただいた。
赤堀岳人、石井克己、小菅将夫、坂本和俊、坂元秀平、鈴木徳雄、大工原　豊、高橋　敦、高林真人、橋本真紀夫、山口逸弘
11. 発掘調査及び整理・報告書刊行に関する組織は、以下のとおりである。

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	勝山　　勉
事務局		事務局長	関和　成昭
	文化財保護課	課　　長	川上　美恵
		課長補佐兼	
		埋蔵文化財係長	太田　博之
		主　　幹	恋河内　昭彦
		主　　査	大熊　季広
		主　　査	松本　　完
		主 事 補	栗原　秀太
		臨時職員	的野　善行
		調 査 員	大塚　昌彦（株式会社測研）

凡　例

1．遺跡全体図におけるＸ・Ｙ座標値は、世界測地系に基づく。
2．各遺構における方位は座標北を示す。
3．遺構図の縮尺は、各図に明示している。
4．遺物の実測図は１/４を基本とし、それ以外は各図に明示している。
5．遺構断面図の水準値は海抜を示す。
6．本書掲載の地形図は国土交通省国土地理院発行１/10,000「本庄」、長沖古墳群発掘調査・確認地点図は本庄市都市計画図１/2,500 に加筆したものを用いた。

目　次

第１章　発掘調査に至る経緯 …… （１）
第２章　遺跡の立地と環境 …… （２）
第３章　長沖古墳群の概要と久保地区Ｄ地点周辺 …… （４）
第４章　検出された遺構・遺物 …… （８）
　第１節　古墳時代 …… （９）
　第２節　縄文時代 …… （25）
　第３節　旧石器時代 …… （29）
　第４節　その他 …… （31）
第５章　自然科学分析 …… （34）
第６章　まとめ …… （37）
参考文献 …… （39）
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　長沖古墳群のスケッチ（明治18年東京人類学会雑誌より）…… 1
第２図　埼玉県の地形図 …… 2
第３図　遺跡位置図 …… 3
第４図　長沖古墳群古墳分布図（2014年現在）…… 5
第５図　長沖古墳群久保地区Ｄ地点とその周辺発掘調査個所 …… 6
第６図　長沖古墳群久保地区Ｄ地点遺跡全体図 …… 8
第７図　66号墳全体図（前回調査部分含む）…… 10
第８図　66号墳石室内遺物出土位置図・石室基底面掘り方図・石室土層断面図 …… 11
第９図　66号墳石室展開図 …… 12
第10図　66号墳石室（玄室）出土耳環実測図（坂本ほか1990より）…… 12
第11図　66号墳周溝平面図・同周溝土層断面図 …… 13
第12図　66号墳周溝内土坑平面図・土層断面図 …… 14
第13図　66号墳周溝内出土土器実測図 …… 16
第14図　66号墳周溝内出土土器拓影図 …… 16
第15図　表採出土埴輪拓影図 …… 16
第16図　１号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図・床下掘り方平面図 …… 17
第17図　１号住居跡貯蔵穴平面図・土層断面図 …… 18
第18図　１号住居跡出土土器実測図 …… 18
第19図　４号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図 …… 20
第20図　４号住居跡遺物出土状況図 …… 21
第21図　４号住居跡床下掘り方平面図・断面図 …… 21
第22図　４号住居跡出土土器実測図 …… 22
第23図　４号住居跡出土土器拓影図 …… 22
第24図　縄文土器拓影図 …… 26
第25図　縄文石器実測図 …… 27
第26図　Ｃ区出土ナイフ形石器 …… 29
第27図　調査区の試掘位置図 …… 30
第28図　旧石器時代試掘調査平面図・土層断面図 …… 30
第29図　旧石器時代出土石器実測図 …… 30
第30図　柱穴列平面図・同土層断面図及び斜め柱穴平面図 …… 31
第31図　土坑平面図・同土層断面図 …… 32
第32図　土坑出土土器実測図 …… 33
第33図　1号住居跡における炭化材の出土状況と樹種 …… 36

第１章　発掘調査に至る経緯

平成26年２月14日、本庄市児玉町長沖字久保272番地１・277番地１・277番地３の土地にコンビニエンスストアの店舗建設を計画している株式会社セブン－イレブン・ジャパン代表取締役井坂隆一氏より、同開発予定地における「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会文書が本庄市教育委員会に提出された。

これを受けて市教育委員会では、同開発予定地を埼玉県教育委員会発行の「本庄市遺跡分布地図」と照会したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地である長沖古墳群（県遺跡番号54－300）の範囲内であり、同開発予定地に隣接する南側は昭和58年（1983年）に都市計画道路環状１号線建設に伴って旧児玉町教育委員会が発掘調査を実施し（恋河内1984）、西側は平成７～８年（1995～1996年）に県道拡幅工事に伴って埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した場所（大谷1999）であった。

そのため、同開発予定地には埋蔵文化財が所在する可能性が極めて高いと考えられることから、事前に試掘調査を実施して、予定地内の埋蔵文化財の所在とその分布状況を把握する必要があることを説明し、事業主体者と土地所有者の了解を得て、３月25日から同28日に現地の試掘調査を実施した。その結果、開発予定地内には遺構の密度は低いながら、古墳時代の竪穴住居跡や調査区の南側に隣接する環状１号線内に所在した長沖66号墳の周溝跡などが検出された。

この試掘調査の結果に基づいて、平成26年３月31日付け本教文第415号により「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の回答を行い、協議のあった開発予定地には埋蔵文化財が所在すること、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第93条第１項により「埋蔵文化財発掘の届出」を埼玉県教育委員会に提出すること、その場合は埋蔵文化財の保存について、事前に市教育委員会と十分協議することなどを通知した。

その後、事業主体者と市教育委員会で先の試掘調査の結果をふまえて協議した結果、敷地西側は駐車場として保存し、東端の店舗建設部分については、埋蔵文化財の現状保存が難しいことから、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

かくして、現地発掘調査は平成26年５月19日から同６月９日までの期間に実施された。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

第１図　長沖古墳群のスケッチ（明治18年東京人類学会雑誌より）

第２章　遺跡の立地と環境

本庄市は埼玉県の北西部に位置している。長沖古墳群は、埼玉県本庄市児玉町長沖に所在する。

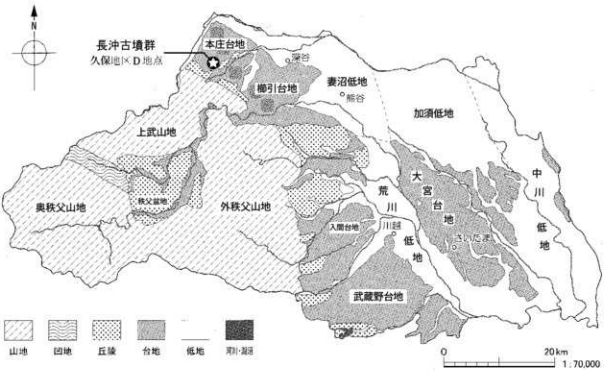
児玉町の町中心部ＪＲ八高線児玉駅から、約 800 m南西方向で長沖古墳群の北東端に位置する 30 号墳、31 号墳に到達する。

その所在は、明治 28 年に発行された鳥居龍蔵氏らの「武蔵秩父地方に於ける人類學的旅行」（阿部他 1895）の中に、考古学的所見を述べている。「児玉郡児玉町より、三四町も大宮の方に行きたる所にて左側の林中に小高き塚らしきもの此處彼處に夥しく存在するを認めぬ。・・・この場所は古来百塚と称しする所にして。塚の数は實に百以上も有らん。」というようにおびただしい古墳の土饅頭が確認されていたのである。

本庄市の地形は、利根川右岸に広がる低地（妻沼低地）と市街地のある台地とその南方に連なる山地（上武山地）とに明瞭に大別される。長沖古墳群は、北側の本庄台地の中に上武山地から児玉丘陵が北東方向に長く伸びており、その丘陵上から台地に移行した地形に位置している。

長沖古墳群は、本庄市児玉町高柳から同長沖にかけての丘陵端部とそこから連続する台地上並びに小山川に形成された河岸段丘上の南斜面にかけて立地している。

長沖古墳群の東西に延びた丘陵地形は、北側に東流する「女堀川」と南側に東流する小山川により、外形を画された形となっている。



第２図　埼玉県の地形図

第３図　遺跡位置図

第３章　長沖古墳群の概要と久保地区Ｄ地点周辺

長沖古墳群は、古墳時代中期から終末期にかけて形成された埼玉県内最大規模の群集墳である。

小山川は北東方向に流下し、同左岸の丘陵から台地面にかけて長沖古墳群は分布している。その範囲は東西 1,700 m、南北 500 mの範囲に分布している。

前方後円墳５基、帆立貝形古墳１基、円墳 196 基の合計 204 基が平成 26 年現在で確認されている。

この古墳群も開発が進み古墳の多くが消滅している。古墳群の規模は、現在確認されたのが 204 基で、削平された古墳などの数はそれと同数位と考えられ、400 基位の規模を推定する。

この古墳群は、南北に貫く谷間を児玉・金沢・秩父県道 76 号線が通り、大きく２分している。西側を高柳支群、東側を長沖支群とよんでいる。

高柳支群の古墳群は、東西方向に伸びる小規模な谷があり、大きく３つの支群に分かれる。現在確認されている古墳の数から、北側は円墳 24 基、中間は前方後円墳１基、円墳 17 基、南側は円墳 22 基である。

長沖支群の古墳群の北西端に位置する 66 号墳は第７次調査の発掘成果から、66 号墳の東側が東西方向の埋没谷となっており、北側にある谷部へと繋がっているものと考えられ南北方向の小さな支群を形成している。

長沖古墳群久保地区Ｄ地点周辺の状況をみてみたい。

昭和 58 年（1983）に都市計画道路環状１号線建設に伴い、開発事前の発掘調査を児玉町教育委員会が長沖古墳群第７次調査（長沖久保地区Ａ地点）として実施している。

発掘調査の結果は、４基の古墳（158 号墳･159 号墳･160 号墳･66 号墳）、古墳時代前期（五領式）の竪穴式住居跡３軒、縄文時代前期（諸磯式）土壙２基の他、縄文時代前期（黒浜式）～中期（加曽利Ｅ式）の埋没谷が発見されている。正式な発掘調査報告書は未刊である。なお、第７次調査は埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会で開催された第 17 回遺跡発掘調査報告会発表要旨による内容である（恋河内 1984）。

平成７年（1995）～平成８年（1996）にかけて県道秩父・児玉線の東側拡幅工事に伴って、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が交差点「金屋南」の南東コーナー部Ｄ区、北東コーナーから北側にかけてＥ区、他３か所を調査している。176･177 号墳の２基が調査され『長沖古墳群』として刊行している。

Ｃ区は 176 号墳（旧村後３号墳）１基の発掘調査で周溝幅２～３m、深さ 23㎝で弧状の溝を確認するが、遺物は何もなかった。ただ、周溝内から旧石器時代のナイフ形石器１点の出土があった。

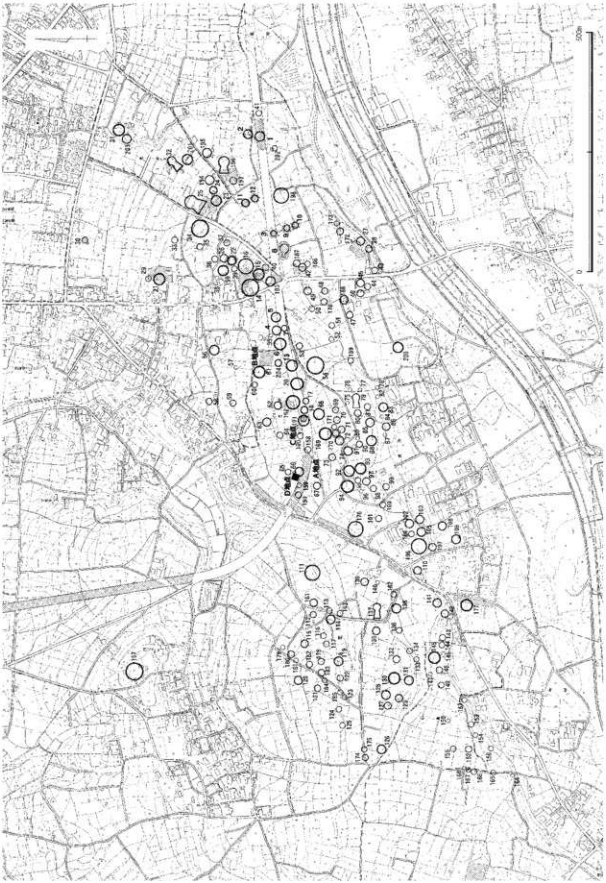
Ｄ区は「金屋南」交差点の南東部であるが古墳時代前期の竪穴住居跡が２軒出土している。

Ｅ区は「金屋南」交差点の北東部で古墳時代前期の竪穴住居跡が３軒出土している。

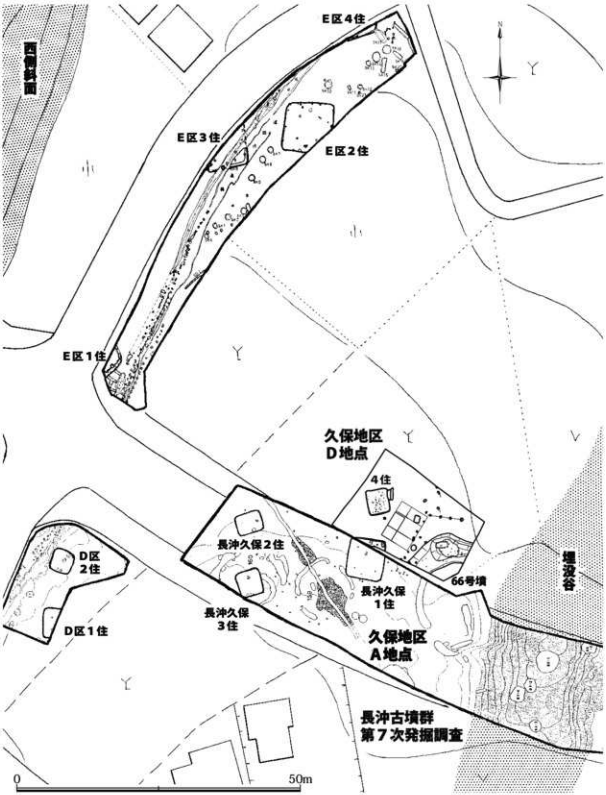
久保地区Ｂ地点は住宅建設事前の発掘調査で、61 号墳南周溝の一部調査を児玉町遺跡調査会が平成２年度に実施。久保地区Ｃ地点は店舗建設事前の発掘調査で、190・191・192 号墳周溝の部分調査を児玉町遺跡調査会が平成 17 年度に実施している。192 号墳からは、円筒埴輪･形象埴輪（翳･靫･太刀形など）が出土している。

長沖古墳群の発掘調査変遷を紹介したい（第１表）。

長沖古墳群の最初の記録調査は、埼玉県立本庄高等学校考古学部が十兵衛塚古墳（79 号墳）を昭和 48 年に墳丘測量を実施した。



第４図　長沖古墳群古墳分布図（2014 年現在）



第５図　長沖古墳群久保地区Ｄ地点とその周辺発掘調査個所

昭和 51 年に児玉町教育委員会が主体となり、1・2・3 号墳の 3 基を第 1 次発掘調査を実施したのを皮切りに、昭和 58 年に第 7 次発掘調査が実施された。平成 26 年現在、本庄市教育委員会が主体となった今回調査した久保地区Ｄ地点に至るまで、これまでに多くの調査地点の実績が認められる。

このことから長沖古墳群の調査を理解するため一覧表とした。

長沖古墳群の調査の概要　（第１表）

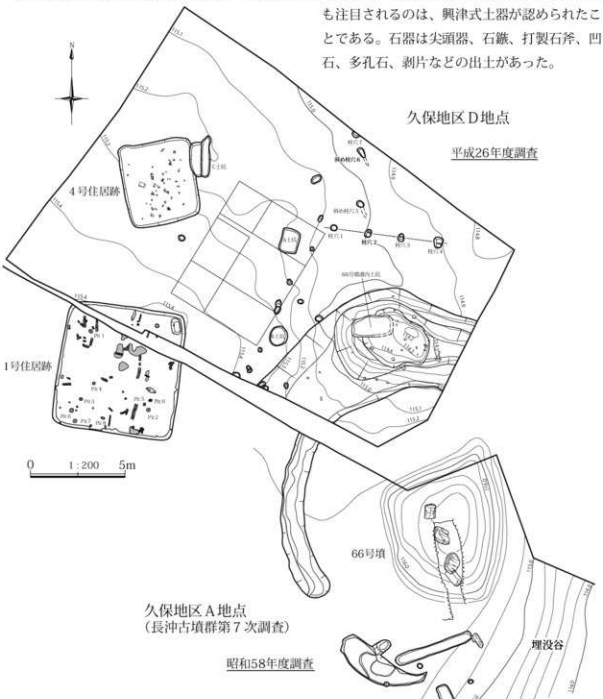
		小字地点	調査年	調査内容（古墳）	調査機関 刊行機関	報告書名	刊行	号数
Ⅰ	1次	貌家ノ上	昭和51年2・3月	1・2・3号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
Ⅰ	2次	貌家ノ上 金屋南	昭和51年6月 ～10月	8・9・10・11・ 12・14・15・16号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
Ⅰ	3次	南 御沢	昭和52年6月 ～10月	22・23・24・ 25・26号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
Ⅰ	4次	江ノ浜 貌家ノ上	昭和53年7月 ～11月	21・27・28・ 29号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
Ⅰ	5次	御沢 貌家ノ上	昭和54年7月 ～10月	25・28号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
Ⅱ	A区	道上	平成7年12月 ～8年5月	177号墳 (道上1号墳)	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
Ⅱ	B区	梅原	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
Ⅱ	C区	村後	平成7年12月 ～8年5月	176号墳 (村後3号墳)	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
Ⅱ	D区	久保	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
Ⅱ	E区	久保	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
Ⅲ		村後A	平成6年7月 ～9月	71・72・169・ 170号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅲ	2002	第36集
Ⅲ		飯玉C	平成8年7月 ～8月	48号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅲ	2002	第36集
Ⅲ		飯玉D	平成10年11月	49号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅲ	2002	第36集
Ⅳ		貌家ノ上	平成11年8月 ～10月	42号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅳ	2002	第37集
Ⅴ		飯玉E	平成15年11月 ～16年1月	188号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅴ	2004	第38集
Ⅵ		御沢	平成15年7月 ～10月	32号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅵ	2003	第2集
Ⅶ		久保B	平成2年4月 ～7月	61号墳	児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群Ⅶ	2007	第14集
Ⅷ		久保C	平成17年9月 ～11月	190・191・ 192号墳	児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群Ⅷ	2008	第21集
Ⅸ		貌家ノ上 中之道B	平成6年10月 ～12月	172・173・ 30号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅸ	2011	第24集
Ⅹ		飯玉B	平成3年11月 ～12月		児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群Ⅹ	2011	第41集
Ⅺ		金屋南	平成17年4月 ～18年1月	14・15・ 40号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅺ	2012	第27集
Ⅻ		貌家ノ上	平成23年7月	202号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅻ	2014	第36集
ⅩⅢ		貌家ノ上	平成21年9月 ～23年6月	194・195・196・ 197・201号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群ⅩⅢ	2014	第39集
ⅩⅣ		久保D	平成26年5月 ～6月	66号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群ⅩⅣ	2014	第42集
※		村後林	昭和48年	79号墳墳丘測量 (十兵衛塚古墳)	埼玉県立本庄高等学校 考古学部	いぶき	1975	8・9 合併号
※		倉林東	平成2年	157号墳	埼玉県教育委員会 さきたま資料館	埼玉県古墳詳細分布 調査報告書	1994	
※	6次	南・久保	—	4・5・7・13・20・ 17・18・19号墳	児玉町教育委員会	未刊		
※	7次	久保A	昭和58年5月 ～9月	66・158・159・ 160号墳	児玉町教育委員会	未刊		
	恋河内昭彦 1984「長沖古墳群の第７次調査」『第 17 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会							

第４章　検出された遺構・遺物

検出された遺構は、古墳時代前期初頭の竪穴式住居跡２軒（１号・４号住居跡）である。古墳時代後期の円墳１基（66号墳）、時期不明の土坑３基、時期不明の柱穴列１（柱穴４本）、時期不明の斜め柱穴２本、時期不明のピット 17 カ所である。古墳時代前期の甕・壺・器台・坩・高坏・器台などの土器が出土している。

旧石器時代は、関東ローム層の姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ層）下層で小破片２点の出土があった。

縄文時代は、前期植物繊維含有土器・同前期後半諸磯式土器・中期土器の出土があった。その中でも注目されるのは、興津式土器が認められたことである。石器は尖頭器、石鏃、打製石斧、凹石、多孔石、剥片などの出土があった。



第６図　長沖古墳群久保地区Ｄ地点遺跡全体図

第１節　古墳時代

６６号墳

66 号墳の調査前の状況は、東西 5.6 m・南北 7.3 m・高さ 1.2 mの規模で、この小山は遺骸埋葬施設である横穴式石室を中心にして存在し、耕作により石室間際まで削平されていたものである。

昭和 58 年度に環状１号線建設に伴う事前の発掘調査を長沖古墳群第７次調査（長沖久保地区Ａ地点）として実施しており、66 号墳の主体部および西側、南側の発掘調査を実施している。

今回の調査は、66 号墳の北西側未調査区の周溝部発掘調査である。

前回調査の 66 号墳概要を説明する。

66 号墳は、西側に長さ 16 m、幅 1.2 m～ 1.5 m、深さ 18㎝の周溝が巡り、一部 2.5 m間は溝が途切れている。また、南側は南東方向に低く下がった埋没谷を形成しており、周溝は存在していない。

東側が谷という環境であり、石室に直接南側から墓参する可能性は低く、先の周溝の途切れた個所は掘り残しによる参道として機能していたことも考えられる。

主体部は、南に開口する横穴式石室で主軸方位はＮ -22° - Ｗである。

石室は胴張り両袖型横穴式石室で、全長 5.2 m・玄室長 3.4 m・奥壁幅 96㎝・玄室最大幅 1.4 m・羨道部長 1.8 m・玄門幅 66㎝を測る。

天井石は４枚検出したが、墳丘上の１枚を除き３枚は石室内に落ちていた。これらは長さ１m前後、厚さ 30㎝前後で中には加工を加えられていたものもあった。奥壁は高さ 90㎝・厚さ 20㎝の一枚石用い、その上には 20㎝の緑泥片岩１石が横積されている。側壁は片岩系河原石で模様積され、奥壁と玄門を立てた後、その間を小口積で埋めていく構築方法である。

右側壁は、全体に小さい石を使用して徐々に持ち送っているが、明瞭な模様積みではない。裏込めは砂利とローム土を用いている。

左側壁は右側壁に比べ、大きい石を揃え模様石は明瞭である。石積み持ち送りはほとんどなく、玄室中央部最下石は直線的に幅 1.5m 間で 10 ～ 20㎝程度玄室側へ張り出している。裏込めは地山の黒色土だけで根石は小口 10 ～ 40㎝の石を用い、地山を掘り込み砂利や礎石を敷いた上に据えられているが、張り出し部には存在せず、普通の扁平な河原石を使用している。

右側玄門石は、高さ 90㎝・幅 50㎝・厚さ 10㎝位の一枚石で、左玄門石は破壊され基部のみの残存である。羨門は壊されている。

棺床面は地山にバラスを敷いた上に、玄室部で２～ 5㎝、羨道部で５～ 15㎝の河原石を敷いている。

遺物は、盛土中並びに周溝内から僅かに円筒埴輪片が出土している。

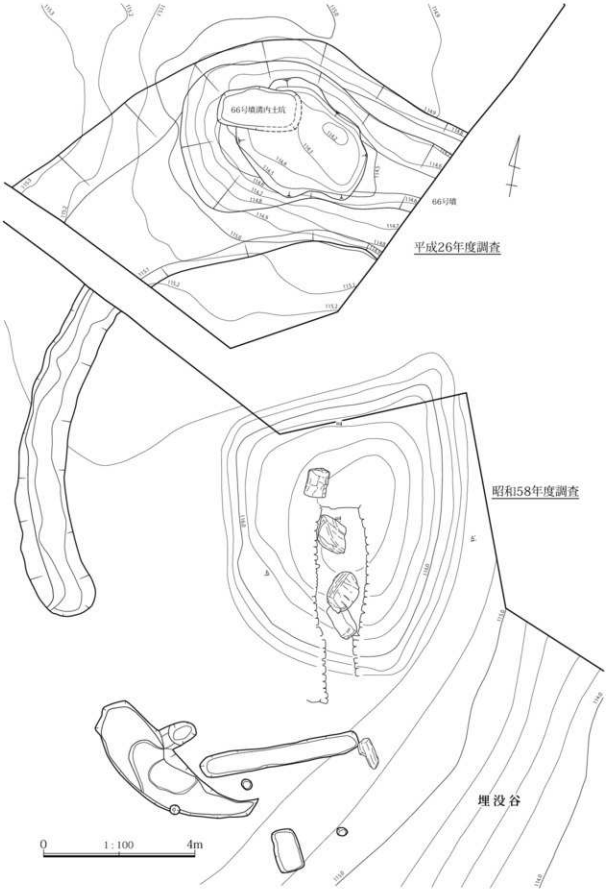
石室内は盗掘を受けていたが、玄室奥壁より右側壁下から人骨片・耳環３点、玄門より左側壁下から刀子１点・鉄片１点の出土があった。その他奥壁寄りで左側の南北約 110㎝、東西 40㎝の範囲に骨粉の分布が認められた。

玄室から出土した耳環は３点である（第 10 図１～３）（註 a）。

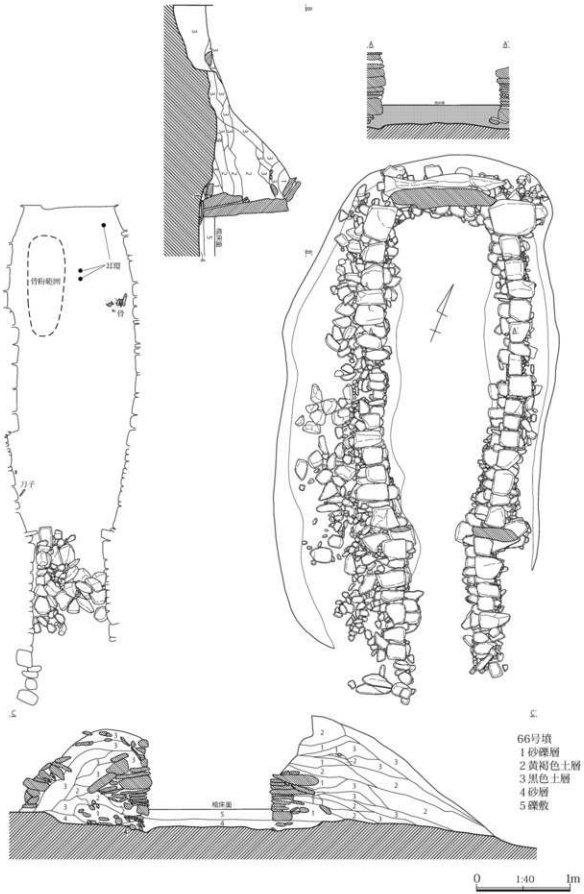
この耳環は、66 号墳玄室内出土品であるが、秋山古墳群報告書（坂本ほか 1990）に誤掲載されていたもので再掲載させていただくものである。

１は単品の中空式金環で、大きさは長径 2.9㎝、短径 2.8㎝、重さは 1.55 ｇである。

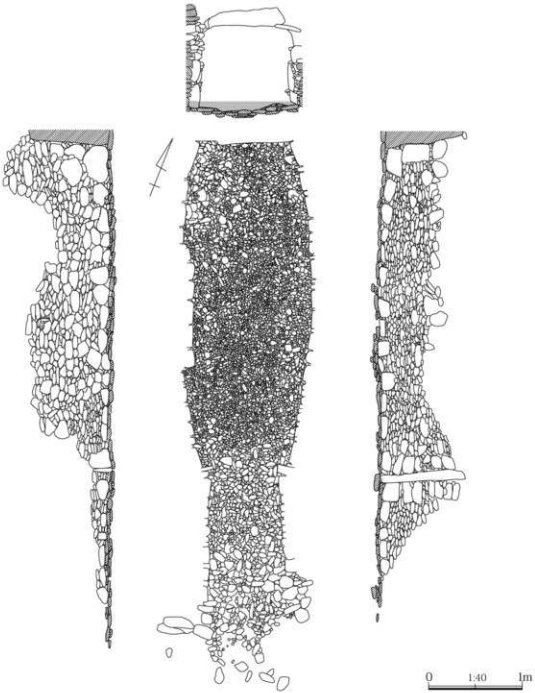
２・３は各々大きさが直径 3.2㎝を測り、重さは 2.55 ～ 2.6 ｇ。表面は銹化のため薄く剥離し、



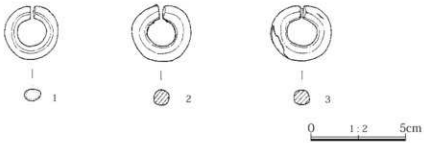
第７図　66 号墳全体図（前回調査部分含む）



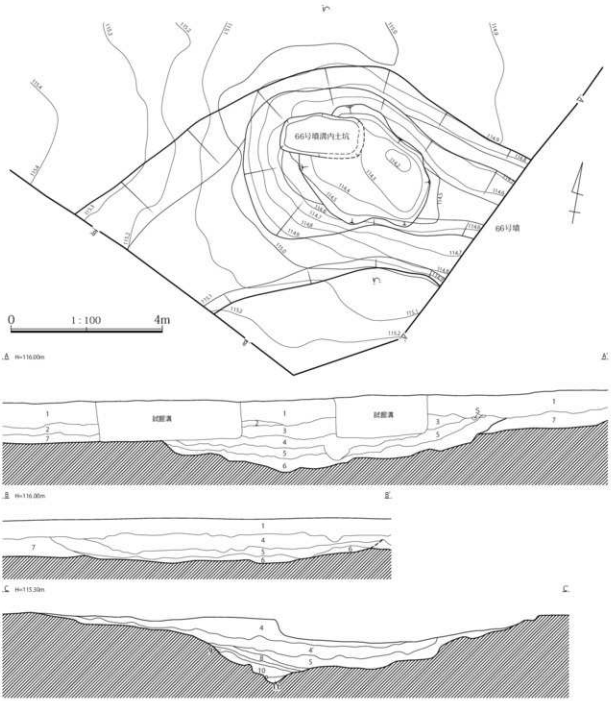
第８図　66 号墳石室内遺物出土位置図・石室基底面掘り方図・石室土層断面図



第 9 図　66 号墳石室展開図



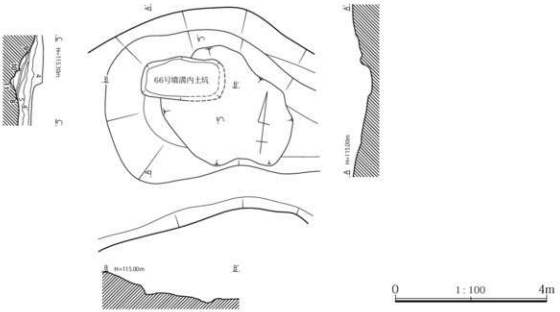
第 10 図　66 号墳石室（玄室）出土耳環実測図（坂本ほか 1990 より）



66号墳北西コーナー(中間西)

1　表土
2　褐色土層:浅間軽石(φ1㎜)を多量に含む。
3　暗褐色土層:ローム粒子を微量に含む。
4　黒褐色土層:ローム粒を微量に含む。しまり有。特に粘性が強い。
4′暗褐色土層:この地層はこの部分にしか存在していないものである。ローム粒子がφ1㎜～5㎜のものが全体に混入している。
5　暗褐色土層:ローム粒を多く含む。ロームブロックφ1㎝弱を少量含む。しまり有。
6　黄褐色土層:ロームブロック粒子を多量に混入。ロームブロックφ0.5～2㎝.3～4㎝を斑状に含む。
7　黄褐色土層:ローム粒子を多量に含み、しまり有。粘性弱い。
8　暗褐色土層:ロームブロックφ1㎝～3㎝を斑状に含み、ローム粒子も含む。しまり非常に強い、粘性あり。
9　黒褐色土層:黒色土層を主体にローム粒子を含む粘性あり。
10暗褐色土層:8層と同じでロームブロックがややφ1㎝～2㎝位と小さくなる。茶褐色土の粘性のあるものがある。
　　(有機質の可能性有)
11暗黄褐色土層:ロームを含む。粘性、しまり強い。

第11図　66号墳周溝平面図・同周溝土層断面図



第 12 図　66 号墳周溝内土坑平面図・土層断面図

緑青がふき出し、部分的に銀箔が残っている。地金の銅は中実である。

66 号墳の時期は、石室の平面形態や構築法などから 7 世紀後半頃の築造と考えられている（註 b）。

今回調査したのは長沖古墳群第 7 次調査の 66 号墳の北西側の周溝部である。

前回調査では周溝幅は 2 m くらいの狭いものであったが、今回は溝幅が西側で 4.5 m、北側で 4.0 m、北西側で 5.5 m、深さは北で 35㎝、西で 45㎝、北西で 70㎝以上と北西部が幅広で深さのあることが確認された。

また、周溝内に土坑の存在があったことが確認された。西側はローム層により確実に掘削されているが東側は推測規模となった。床面には黒色層や灰色の粘性の強い層が面的に広がっている。なお、この土坑のところだけに他の土層に存在していない地層がある。古墳覆土中に貼り床した特異な土坑である。

この土坑の平面形は長方形で大きさは、東西 2.2 m、南北 1.15 m、深さ 25㎝東西方向に長く、真北方向に直行する形で主軸方位はW - 4 ° - S である。

この土坑は周溝内土坑で、いわゆる特異な位置に埋葬施設を持つものと考えることができる。床面上には白い 1 ㎝の粘性の強い物質があった。この白い粘性の強い物質が床一面に存在していたものと考える。

今回調査で得られた北西部周溝を前回古墳調査図面と重ねると第 7 図のようになる。古墳の墳形規格は玄室奥壁の位置が中心となり、墳丘規模は直径 14 m を測る。前回調査周溝は、削平が深く周溝底が残る程度であったため、周溝幅は平均 1.5 m深さは 20㎝であった。この古墳の周溝外側の立ち上がりで直径 17 m を測ることができる。しかし、北西周溝の遺存状況は良好で、西側周溝は幅 4.8 m、深さ 20cm、北側周溝幅は 4.2 m、深さ 60cm である。今回の調査分の残り良い周溝外側立ち上がりは半径 10.5 m であり、周溝外径 21 m を測る円墳である。また、周溝北側は通常周溝より 1 m以上張り出している、これは周溝内土坑の存在が関連しているものと考える。

今回の周溝調査では、この古墳に伴う出土遺物はなかった。

周溝内から出土した石は、27 点の自然石が出土したが、これらはすべて古墳盛土側からの流入で

ある。この石は古墳葺石の石材が考えられる。石の出土した高さは、掘りの浅い西側では底面から10～15㎝であるのに対して北西コーナーでは30～40㎝の出土を示している。

なお、長沖古墳群では古墳の石材鑑定を実施した例がなく、今回がはじめての事例となる。

27点と少量ではあるが石材鑑定を行った結果は、別表のとおりである。

緑色片岩13点、雲母片岩9点、泥質片岩1点、緑色岩1点、礫質砂岩1点、砂岩2点である。数量が少ないが、緑色片岩48％、雲母片岩33％、泥質片岩4％、緑色岩4％、礫質砂岩4％、砂岩7％と1つの石材組成を見ることができた。

66号墳周溝内　出土石計測表　（第2表）

番号	縦㎝	横㎝	厚㎝	重量g	石質	備考	番号	縦㎝	横㎝	厚㎝	重量g	石質	備考
1	17.3	15.0	16.8	5,550.0	緑色片岩	葺石	15	13.8	10.3	6.3	1,274.0	緑色片岩	葺石
2	12.1	10.2	5.1	982.3	緑色片岩	葺石	16	18.5	16.7	10.6	4,740.0	緑色片岩	葺石
3	15.7	14.5	10.8	3,370.0	緑色片岩	葺石	17	5.3	11.7	1.0	49.0	雲母片岩	葺石
4	8.0	6.0	1.2	115.6	緑色片岩	葺石	18	15.7	7.0	2.6	313.6	緑色片岩	葺石
5	10.6	4.1	3.2	195.7	緑色岩	葺石	19	22.3	11.7	9.8	3,090.0	砂岩	葺石
6	11.7	7.1	4.0	464.9	砂岩	葺石	20	15.7	9.2	3.8	611.7	緑色片岩	葺石
7	18.8	10.0	5.2	1,098.0	雲母片岩	葺石	21	2.8	7.6	7.8	73.4	緑色片岩	葺石
8	12.3	6.2	3.1	403.2	雲母片岩	葺石	22	14.3	14.8	10.8	3,890.0	緑色片岩	葺石
9	10.8	6.4	2.9	262.8	雲母片岩	葺石	23	16.1	10.4	6.2	1,353.8	礫質砂岩	葺石
10	9.2	3.4	2.5	97.9	泥質片岩	葺石	24	13.7	11.2	5.2	1,199.0	雲母片岩	葺石
11	22.0	15.0	3.8	1,648.0	雲母片岩	葺石	25	18.8	11.3	7.4	1,794.0	雲母片岩	葺石
12	21.2	15.0	5.9	1,980.0	緑色片岩	葺石	26	12.8	9.6	1.8	316.2	緑色片岩	葺石
13	16.7	16.2	9.0	3,400.0	緑色片岩	葺石	27	11.7	7.3	3.2	452.2	雲母片岩	葺石
14	12.0	12.0	6.3	1,103.0	雲母片岩	葺石							

その他の遺物

その他の遺物は、66号墳の周溝内出土遺物他で古墳築造の年代とは異なっている古墳時代の遺物を報告する。

1は坩形土器、2は有段口縁の壺形土器である（第13図）。

3・4は壺口縁部のであり、外面はハケ目調整、内面はヘラ横ナデ調整である。

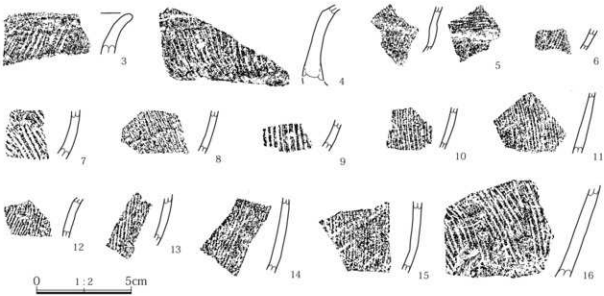
5・6は坩形土器の口縁部から腰部にかけての破片で、外器面はハケ目調整、内面口縁はヨコハケ調整。7は小壺破片である。これらは古墳時代前期の集落に伴う遺物と同時期のものである。

8から16（第14図）は、台付甕の胴部破片で器肉は薄く、調整はハケ目調整である。

66号墳周溝内　出土土器観察表　（第3表）　　( ) 推定数値　[ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	坩	周溝	(12.0)	-	[5.0]	砂粒	良好	橙	外面口縁部斜方向のヘラミガキ調整。横位沈線で底部に移行する。内面口縁部は縦方向のヘラミガキ調整。	口縁部破片
2	有段口縁壺	周溝	(28.4)	-	[5.0]	砂粒	良好	橙	口唇部欠損。口縁部は有段口縁で3本の粘土紐を縦に等間隔に貼り付け、隆帯頂部を櫛歯状工具により連続刺突文を施文。口縁は縦方向のヘラナデ調整。内面の表面は全体的に剥落。一部に斜方向のヘラミガキが存在。大廓式土器。	口縁部破片

第 13 図　66 号墳周溝内出土土器実測図



第 14 図　66 号墳周溝内出土土器拓影図

第 15 図　表採出土埴輪拓影図

17（第 15 図）は、円筒埴輪破片で内外面ともハケ目調整、上半は内外面とも剥落している。

註

註 a　秋山古墳群庚申塚古墳・報告書（坂本ほか 1990）の中に掲載された耳環が、実際は本墳石室から出土した耳環であり、今回の報告で修正掲載させていただいた。誤掲載されたのは、第 17 図 1・6・7 の耳環である。

註 b　平成 58 年度の調査内容については、基本的に下記参考文献を参照した。

恋河内昭彦 1984「長沖古墳群の第 7 次調査」『第 17 回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会

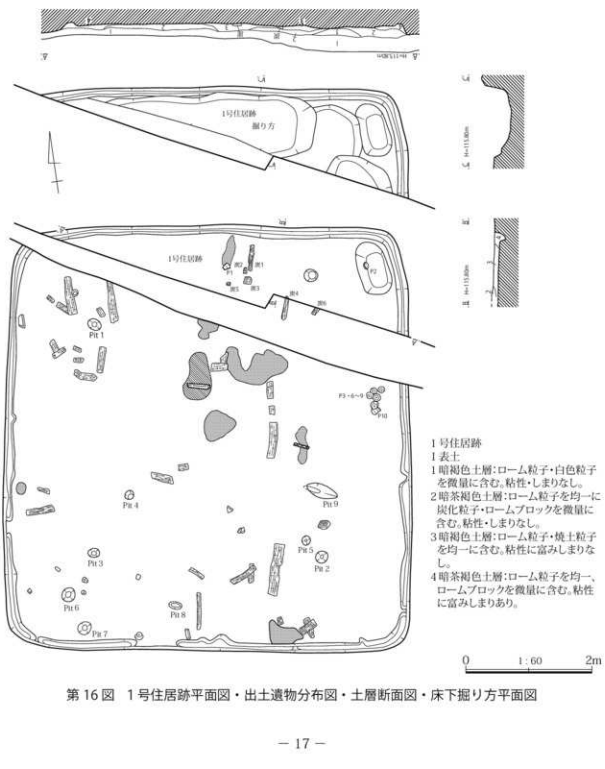
竪穴式住居跡

1号住居跡

昭和58年度に環状1号線建設工事に伴う事前の発掘調査を長沖古墳群第7次調査（長沖久保地区A地点）として実施しており、1号住居跡の発掘調査を実施している。今回の調査は1号住居跡北東側未調査区の発掘調査である。

平面形は隅丸方形で、規模は北側の調査ができ南北規模の測定が可能となり、南北6.7 m、東西6.5 mで確認面からの壁高は20cm前後である。

遺構確認面は関東ローム層である。



第16図　1号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図・床下掘り方平面図

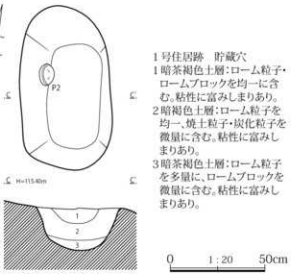
北側の調査であったが、その北東コーナー部に貯蔵穴を付設している。

貯蔵穴の平面形は楕円形で、規模は南北85㎝、東西48㎝、深さ22㎝である。

壁溝は全周しているが、西壁・南壁に各1か所ずつ僅かに途切れたところがある。

炉は住居中央やや北寄りに位置している。地床炉で中央に細長い川原石を東西方向に設置している。炉は不定楕円形で大きさは南北40㎝、東西24㎝である。

主柱穴は前回の調査で3本認められ、北東柱穴は未調査地に位置し、4本柱と考える。



1号住居跡　貯蔵穴
1暗茶褐色土層:ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富みしまりあり。
2暗褐色土層:ローム粒子を均一、焼土粒子・炭化粒子を微量に含む。粘性に富みしまりあり。
3暗茶褐色土層:ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量に含む。粘性に富みしまりあり。

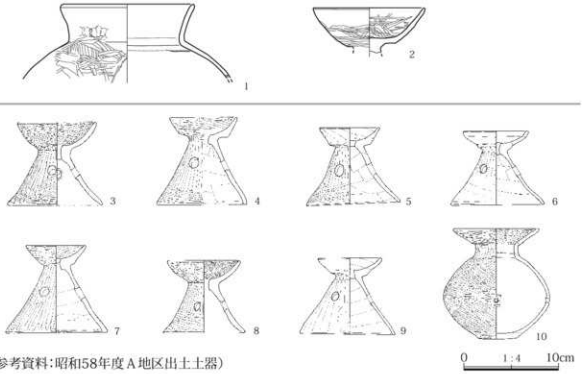
第17図　1号住居跡貯蔵穴平面図・土層断面図

床面は平坦であるが、床は一旦20㎝位荒掘りし、埋め戻し貼り床している。貯蔵穴周辺は特に念入りに2㎝位の版築状の貼り床が顕著に施されている。

同住居は焼失家屋であり、7次調査では30点ほどの炭化材が確認されている。今回の調査部においても6点の屋根垂木の炭化材と焼土分布を確認することができた。焼土は床面からは5㎝位浮いた位置に認められる。

炉の周辺には焼土分布が3か所、南・西・北壁脇に各1か所ずつ分布が認められる。

今回の6点の炭化材については、住居構築材の樹種同定（分析）をできるようにサンプリングしてある。炭化材は基本的に屋根構築材であり、垂木材がほとんどである。



（参考資料:昭和58年度A地区出土土器）

第18図　1号住居跡出土土器実測図

竪穴住居床面下の掘り方は、竪穴住居の北壁ラインに沿って平面形が短冊状に東西3.4 m、幅70～80cm前後で深さ10cm前後を掘られており、住居を掘る作業工程並びに1人の作業範囲をみることができた。

遺物は貯蔵穴から高坏の坏部分の出土があるが、焼土上から土師器甕口縁部の出土である。

3～10は、第7次調査で出土した土器で完形の器台が5点と小形壺1点が1カ所からまとまって出土した。器台が7点、胴部に穿孔を持つ小形壺1点と共に直刃鎌1点・ガラス小玉1点が出土している。

1号住居跡　出土遺物観察表　（第4表）　　( ) 推定数値　[ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	甕	P 1	14.2	-	[8.2]	砂粒	良好	暗橙	外面肩部ヘラミガキ調整ランダムに施す。口縁部下端指頭圧痕が横位に連続している。内面ヨコナデ調整。	口縁部1/2
2	高坏	貯蔵穴	12.0	5.0	[4.8]	砂粒	良好	橙	内外面ともヘラミガキ調整。内面に黒斑有。脚との接合部で歪みがある。	坏部のみ脚欠損
3	器台	前調査№1	8.4	10.2	8.8	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔4カ所。穿孔はミガキ調整後。脚部外面に黒斑有。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器台中央に穿孔有。内面器部ヘラミガキ調整。脚部内面ナデ調整。	ほぼ完形
4	器台	前調査№15	7.2	9.6	9.3	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔3カ所。穿孔はミガキ調整後。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。内面器部ヘラミガキ調整。脚部内面ヘラナデ調整。	ほぼ完形
5	器台	前調査№19	6.4	10.1	8.3	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔3カ所。外面器部ヘラナデ調整。脚部はヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。内面はヘラナデ調整。	完形
6	器台	前調査№4	7.0	10.0	7.9	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔3カ所。調整後穿孔。外面器部と脚下半はヘラナデ調整。脚上部ヘラミガキ調整。接合部は棒状工具による押え。器受部中央に穿孔有。脚部外面黒斑有。内面はヘラナデ調整。	完形
7	器台	前調査№5	6.4	10.9	9.3	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔3カ所。穿孔はミガキ調整後。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。器内面はヘラミガキ調整。脚内部はナデ調整。	ほぼ完形
8	器台	前調査№2	7.8	8.7	7.7	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔3カ所。焼成前に穿孔。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。器内面にヘラミガキ調整、脚部内面はナデ調整。器受部内面・脚外面黒斑有。	ほぼ完形
9	器台	前調査№3	6.8	10.2	8.2	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔3カ所。穿孔はミガキ調整後。外内面全面ヘラナデ調整。器受部中央に穿孔有。外面脚接合面に棒状工具による押え痕有。	完形
10	壺	前調査№6	9.2	4.1	11.7	砂粒	良好	褐色	胴部穿孔土器、粘土紐積み上げ整形、胴部外面に黒斑有。頸部タテナデ調整、口縁部・胴部最大径部を横方向のヘラミガキ、それ以外を斜方向のヘラミガキ調整。内面口縁部は横方向のヘラミガキ調整。	ほぼ完形

4号住居跡

平面形は隅丸長方形で、規模は南北 4.4 m、東西 3.8 m、壁高は 20㎝である。

この住居は、炉、柱穴、貯蔵穴、壁溝が見られない。床は貼り床されており、床面は平坦である。

貼り床は、暗褐色土層を主体にし、ローム層のブロック直径 4 ㎝以下を攪拌して貼り床されており、床面はロームが斑状に模様を作っている。

調査の結果は幅 70 ～ 80㎝で短冊状に掘っており、住居の壁面四辺に沿って掘られている。掘削における一人の工区仕事量を把握できたものと考える。掘り方は 6 か所あり、次に説明したい。

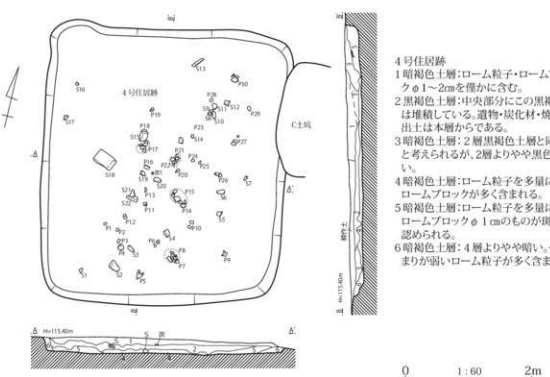
掘り方 1 は平面形が長方形で南北 1.8 m、東西 92㎝、深さ 8 ㎝である。掘り方 2 は平面形が不正長方形で南北 80㎝、東西 1.4 m、深さ 10㎝である。掘り方 3 は平面形が不正長方形で南北 2.8 m、東西 80㎝、深さ 10㎝である。掘り方 4 は平面形が長不定形で南北 80㎝、東西 2.2 m、深さ 10㎝である。掘り方 5 は平面形が不正楕円形で南北 1.6 m、東西 80㎝、深さ 6㎝である。掘り方 6 は平面形が不長楕円形で南北 30㎝、東西 80㎝、深さ 6㎝である。掘り方 6 は小さな掘り方であり、住居ほぼ中心に位置することから地床炉に関連する痕跡の一部と考えることができる。

遺物は床直の出土状況ではなく、すべて床から 5 ～ 10㎝以上浮いた状況で出土している。

遺物は、土器が 30 点、石器が 7 点、礫 15 点、炭化材 1 点である。

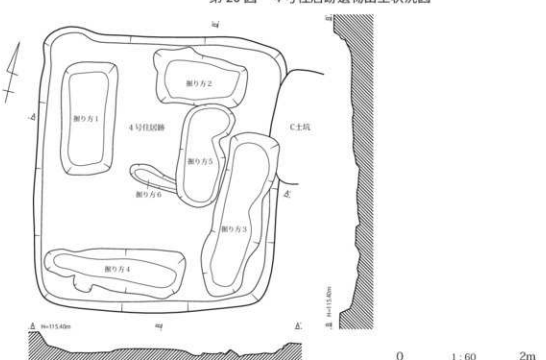
第 23 図 15・16 は、縄文施文を施した吉ケ谷系土器の甕形土器である。縄文はＬＲである。

第 23 図 17 ～ 22 は器厚が 2 ～ 3 ㎜と薄く、器面に櫛歯状工具によるハケ目調整を施している S 字状口縁台付甕の一群である。17 は台付甕の S 字状口縁部最下段の隆帯と沈線で、頸部の括れ部分である。

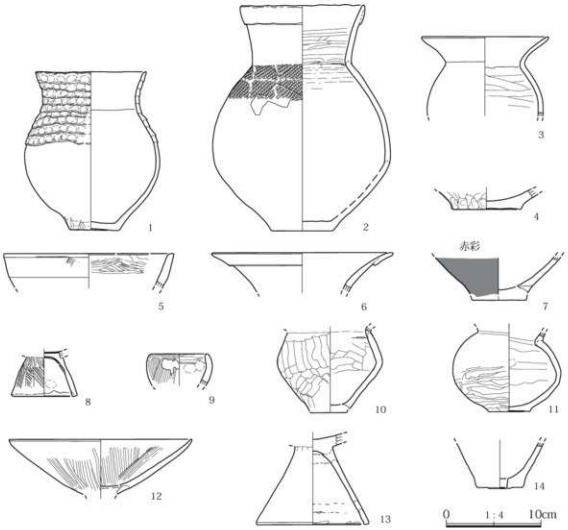


第 19 図　4号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図

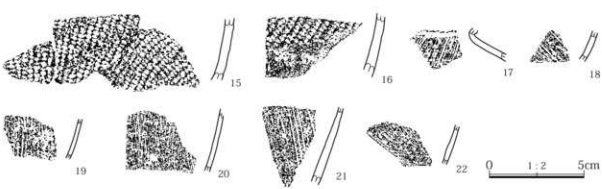
第 20 図　4 号住居跡遺物出土状況図



第 21 図　4 号住居跡床下掘り方平面図・断面図



第 22 図　4 号住居跡出土土器実測図



第 23 図　4 号住居跡出土土器拓影図

炭化材は顕微鏡観察で樹皮だけであったことがわかり、樹木の鑑定はできなかった。

土器は接合できる資料が多くあり、礫も 5 点が接合できた。

この土器群は古墳時代前期の古式土師器であるが、この地域の弥生時代後期の吉ケ谷式土器の系譜を引く甕、壺胴部肩部に縄文の施文する土器群。また、群馬県の樽式土器の系譜を引く壺や高坏、S 字状口縁台付甕など弥生時代から古墳時代への過渡期であり、異系統土器の入り乱れた状況は当地域の該期土器の特徴でもあり大変興味深い。

4号住居跡　出土遺物観察表　（第５表）　　( ) 推定数値　[ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	甕	P 17 P 18	11.8	5.6	16.7	砂粒	良好	橙	口縁部多段輪積痕を９段残す。多段部は１段ずつ指頭圧痕が横位に残されている。輪積痕が顕著である。胴部下半縦ヘラミガキ調整。底部若干上げ底。吉ケ谷式系土器。	口縁部 1/2
2	壺	P 1 P 3 P 4 P 7 P 8	(13.2)	6.6	23.8	砂粒	良好	橙	口縁部複合口縁。頸部ヨコナデ調整、肩部にＬＲ縄文の施文を施している。体部はヘラミガキ調整。状態が悪く図化はできなかった。内面口縁は横ヘラミガキ調整、内部も小さな剥落痕が多数存在する。体部下半小さな剥落痕多数有。器最大幅胴部中位にある。底部大きく剥落。黒斑有。吉ケ谷式系土器。	口縁部 4/5 欠損
3	広口壺	P 11	(13.6)	-	[8.2]	砂粒	良好	橙	黒斑有。未接合品復元実測。外面ヨコナデ調整不鮮明、内面横方向のヘラナデ調整。	口縁部破片
4	壺	P 14	-	7.4	[2.2]	砂粒	良好	橙	体部下端部に指頭圧痕が顕著に有、底部に籾圧痕有。	底部
5	壺	P 5	(18.0)	-	[3.6]	砂粒	良好	黒	器面はヘラミガキが丁寧に施されている。内面はハケ目調整後ヘラミガキ調整。口唇部は幅７㎜の平坦で端部がシャープに作られている。	口縁部破片
6	壺	P 19	(19.2)	-	[4.1]	砂粒	良好	橙	口縁部折り返し口縁ヨコナデ調整。頸部までは縦ヘラミガキ調整。内面ヨコナデ調整。樽式系土器。	口縁部破片
7	壺	P 23 P 24	-	(6.2)	[3.8]	砂粒	良好	橙	外面赤色塗彩、黒斑有、底部輪積剥落痕。内面ヨコナデ調整、内面表面はほとんど剥落。	底部破片
8	Ｓ字状口縁台付甕	P 20 P 25	-	7.0	[4.8]	砂粒	良好	外橙内黒	外面櫛歯状工具による縦・斜方向ハケ目、内面脚部折り返し、内外面に薄く別のオレンジ粘土で重ね焼きされている。	台部
9	小鉢		(6.0)	-	[3.3]	砂粒	良好	橙	外面ハケ目整形、内外面口縁部ヨコハケ調整、外面剥落痕、内面指頭圧痕有。	口縁部欠損
10	小甕	P 30	-	4.4	[8.3]	砂粒	良好	橙	外面上半はタテヘラ削り、下半は斜方向のヘラ削り、内面はヨコナデ調整黒斑有。	口縁・底部欠損
11	小壺	P 6	-	4.4	[8.8]	砂粒	良好	橙	外面はヘラによるヨコナデ調整、黒斑有、黒斑部のみでナデ調整が確認できる。若干上げ底。内面はヘラ調整。指頭圧痕有。	口縁・底部欠損
12	高坏	P 2	(19.4)	-	[5.8]	砂粒	良好	橙	坏と脚部で剥落。内外面とも縦方向のヘラナデ調整。	坏部 1/2
13	高坏	P 21 P 22 P 26	-	12.0	[9.7]	砂粒	良好	白橙	外面脚接合部ヘラ調整、内面輪積整形痕４か所有。内外面器面が風化。	脚部
14	甑		-	(5.2)	[4.7]	砂礫	良好	褐色	胎土に砂礫が多量に含まれ内外面ザラザラ、底部に直径 1.4㎝の孔が内側から外側にあけられている。	底部 1/2

4号住居跡　出土石計測表　（第６表）

番号	縦　cm	横　cm	厚さ　cm	重量　g	石質	種類	図面番号
1	6.1	7.1	1.4	38.4	ホルンフェルス	剥片	第 25 図 - 7
2	22.0	13.0	7.0	2,200.0	緑色片岩	多孔石	第 25 図 -10
3	13.7	6.3	2.9	318.2	雲母片岩	礫	
4	13.3	9.2	4.6	829.7	雲母片岩	礫	
5	10.8	8.2	3.7	305.9	雲母片岩	礫	
6	13.2	6.8	2.1	260.1	雲母片岩	凹石	第 25 図 - 9
7	8.4	4.6	1.8	114.4	緑色片岩	打製石斧	第 25 図 - 4
8	6.2	4.7	3.1	118.7	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
9	6.9	5.0	3.3	159.0	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
10	11.8	6.2	2.8	275.8	泥質片岩	礫	
11	12.0	11.0	3.5	549.9	雲母片岩	礫	
12	8.6	7.7	3.4	363.1	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
13	21.7	8.0	5.3	999.4	雲母片岩	礫	
14	8.8	6.8	3.3	326.0	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
15	17.7	11.5	7.4	2,140.0	礫質砂岩	礫	
16	7.1	6.4	1.4	84.8	雲母片岩	礫	
17	9.8	8.6	5.2	404.3	輝石デイサイト	地山内の石	
18	34.5	21.5	12.0	16,750.0	緑色片岩	礫 8+9+12+14 と同一個体	
19	10.3	7.2	5.3	541.3	石英片岩	礫	
20	21.2	7.0	4.2	981.4	泥質片岩	礫	
21	13.1	7.2	1.9	220.2	緑色岩	礫	
22	12.1	14.0	3.6	404.2	緑色片岩	礫	
23	1.7	1.4	0.5	1.1	チャート		
24	1.7	1.9	0.4	0.6	チャート		
25	1.6	1.7	0.3	0.6	チャート		

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は存在していない。

縄文時代の遺物は、66 号墳周溝内や４号住居跡覆土内、表採で出土している。

土器

前期前半黒浜式期の繊維含有土器、前期後半諸磯式土器などの他に、北関東地方の茨城県地方で特徴ある興津式土器が出土している。

第１群土器（第 24 図１～４）早期の土器を一括する。１は無文系土器の口縁部破片である。２・３・４は条痕文系土器群である。４は口縁部片で半截竹管の平行沈線が横位と弧状に施されている。

第２群土器（第 24 図５～９）は、前期前半黒浜式土器のもので、胎土に植物繊維を多量に含有している一群である。５・６は半截竹管による平行沈線文を施文、５は地文に０段多条の縄文を、６は無文である。７は０段多条の縄文を羽状に施文し、全体的には菱形縄文を構成している。８・９は０段多条縄文である。

第３群土器（第 24 図 10 ～ 17）は、前期後半諸磯ｂ式土器の一群である。

10 ～ 13・17 は櫛歯状工具により横位・縦位・弧状文を施文している。

14 ～ 16 は半截竹管による横位・斜位方向の平行沈線を施文している。17 は底部片である。

第４群土器（第 24 図 18 ～ 21）は、前期後半諸磯ｂ式～ｃ式土器にかけての一群である。

18 ～ 20 は口縁部破片である。18 は地文に半截竹管による平行沈線文を施し、その上に結節浮線文を複数条直線や弧線施文されている。19 ～ 21 は櫛歯状工具による櫛引き文である。19 は耳状の把手である。21 は肩部片である。

第５群土器（第 24 図 22 ～ 28）は、前期後半諸磯ｃ式土器の一群である。22・23 はボタン状貼り付け文で地文が櫛歯状工具による櫛引き文である。24 ～ 26 は櫛引きによる綾杉状文が、27・28 は櫛引き文が施されている。

第６群土器（第 24 図 29）は、前期後半十三菩提式土器である。

29 は結節浮線文による同心円状モチーフが配されている。

第７群土器（第 24 図 30 ～ 37）は、前期後半諸磯ｂ式～ｃ式にかけての縄文施文土器の一群である。30・31 は無節Ｌ縄文。32・33 は単節ＬＲ縄文。34 ～ 37 は単節ＲＬ縄文である。

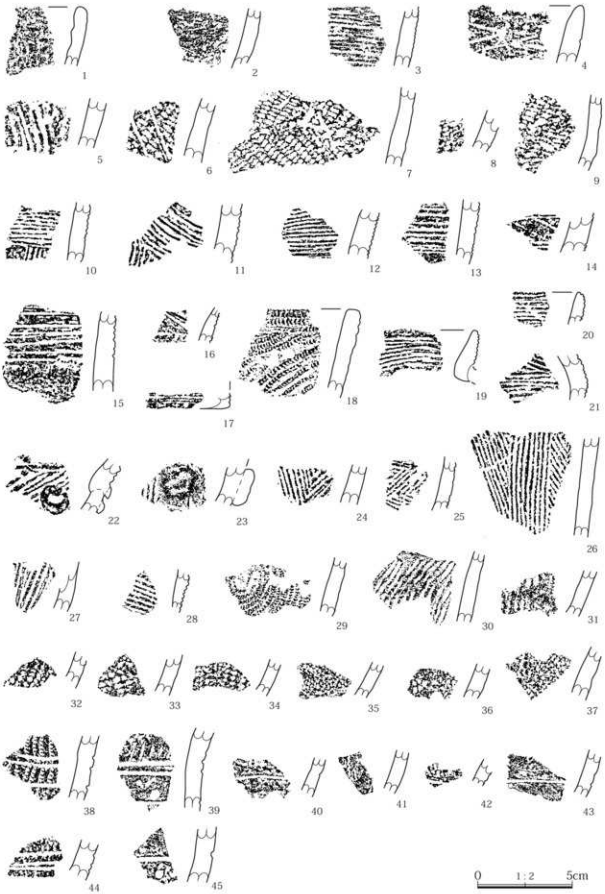
第８群土器（第 24 図 38 ～ 43）は、前期後半興津式土器の一群である。

この土器群は現在の北関東茨城県を主とする土器で、胎土には石英を含み、在地の結晶片岩は一切含まれていない。特徴は二枚貝（ハイ貝等）の側縁部の圧痕を施したものである。38・39 は半截竹管による平行沈線の上下に直行する貝殻の側縁部の圧痕を連続施文している。40・41 は１条の横位沈線と平行に貝殻の側縁部の圧痕を施文している。42 は半截竹管の平行沈線文の沈線に沿って貝殻の側縁部の圧痕を施文している。43 は一条の横位沈線が施してある。

第９群土器（第 24 図 44・45）中期の一群である。44 は勝坂式土器で半截竹管による横位平行沈線に沿って半截竹管による刺突文を連続施文している。45 は加曽利Ｅ式土器で横位沈線に区画された中を棒状工具による刺突文を連続施文している。

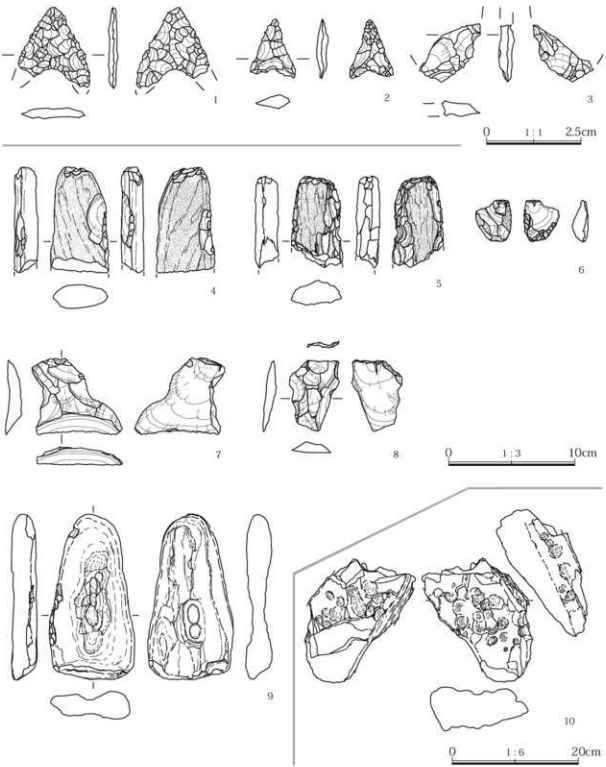
石器

石器は、剥片石器と礫石器に分けられる。



第 24 図　縄文土器拓影図

剥片石器としては、石鏃２点、尖頭器１点、打製石斧２点、削器１点、加工痕ある剥片１点、剥片30点、礫石器としては凹石１点、多孔石１点がある。合計39点の出土がある。
石材としては黒曜石16点、チャート９点、頁岩６点、ホルンフェルス４点、雲母片岩２点、緑色片岩２点が出土している（第７表）。



第25図　縄文石器実測図

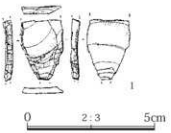
縄文時代　出土石器一覧表　（第７表）

番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	重量 g	石質	種類	位置	図面番号
1	1.5	1.2	0.4	0.4	チャート	石鏃	66 墳	第 25 図 - 2
2	1.5	1.1	0.4	0.7	チャート	石槍	66 墳	第 25 図 - 3
3	2.0	2.8	1.0	5.9	チャート	剥片	66 墳	
4	1.1	1.5	0.3	0.3	チャート	剥片	66 墳	
5	4.4	4.4	0.7	10.8	ホルンフェルス	剥片	66 墳	
6	2.6	3.9	0.8	5.7	ホルンフェルス	剥片	66 墳	
7	5.4	4.2	1.4	19.0	頁岩	剥片	66 墳	
8	1.5	2.0	0.4	1.2	頁岩	剥片	66 墳	
9	3.0	1.5	0.5	1.7	黒曜石	剥片	66 墳	
10	2.4	1.5	0.5	1.2	黒曜石	剥片	66 墳	
11	2.2	1.5	0.5	1.0	黒曜石	剥片	66 墳	
12	1.7	1.9	0.3	0.9	黒曜石	剥片	66 墳	
13	1.9	0.8	0.5	0.6	黒曜石	剥片	66 墳	
14	1.5	1.6	0.3	0.3	黒曜石	剥片	66 墳	
15	1.8	1.0	0.3	0.2	黒曜石	剥片	66 墳	
16	1.0	1.3	0.3	0.2	黒曜石	剥片	66 墳	
17	0.6	0.8	0.1	0.1	黒曜石	剥片	66 墳	
18	6.1	7.1	1.4	38.4	ホルンフェルス	剥片	4 住	第 25 図 - 7
19	22.0	13.0	7.0	2,200.0	緑色片岩	多孔石	4 住	第 25 図 -10
20	13.2	6.8	2.1	260.1	雲母片岩	凹石	4 住	第 25 図 - 9
21	8.4	4.6	1.8	114.4	緑色片岩	打製石斧	4 住	第 25 図 - 4
22	1.7	1.4	0.5	1.1	チャート	覆土	4 住	
23	1.7	1.9	0.4	0.6	チャート	覆土	4 住	
24	1.6	1.7	0.3	0.6	チャート	覆土	4 住	
25	3.3	2.8	1.3	8.5	頁岩	加工痕のある剥片	C 土坑	第 25 図 - 6
26	7.3	4.1	1.9	70.4	雲母片岩	打製石斧	表採	第 25 図 - 5
27	5.6	4.0	0.9	1.9	頁岩	剥片	表採	第 25 図 - 8
28	1.6	3.1	0.4	2.1	頁岩	剥片	表採	
29	4.6	2.6	1.3	12.9	頁岩	剥片	表採	
30	4.2	4.3	1.1	15.6	ホルンフェルス	剥片	表採	
31	2.1	1.9	0.3	0.9	黒曜石	石鏃	表採	第 25 図 - 1
32	2.2	1.4	0.6	1.9	黒曜石	剥片	表採	
33	2.2	1.9	0.5	1.2	黒曜石	剥片	表採	
34	1.6	1.6	0.6	1.0	黒曜石	剥片	表採	
35	2.1	0.9	0.4	0.6	黒曜石	剥片	表採	
36	0.8	0.5	1.5	0.1	黒曜石	剥片	表採	
37	0.9	0.5	0.2	0.1	黒曜石	剥片	表採	
38	0.9	1.7	0.2	0.3	チャート	剥片	表採	
39	1.1	1.1	0.2	0.2	チャート	剥片	表採	

第３節　旧石器時代

長沖古墳群県調査分Ｃ区(大谷 1999)で、176号墳(村後３号墳)出土の黒曜石製のナイフ形石器１点（第 26 図１）の出土があり、旧石器時代の発見される可能性がある。本地点においても古墳の周溝から黒曜石の小破片があり、旧石器時代の可能性を推測することができた。

このようなことから調査区域の中央に東西５m、南北７mの範囲に試掘を試みた（第 28 図）。



第 26 図
Ｃ区出土ナイフ形石器

調査の結果、北西隅で深さ１mの浅間―板鼻褐色軽石層（ＢＰユニット層）のところからチャート製の小剥片が出土した。

この他、ローム中に含まれる石はすべてチェックして取り上げたが、１点だけチャート製の小剥片が含まれており、合計２点が石器であった。この剥片は両方とも打面・打点が残されているもので、人工的に母岩から剥離されたものである。

この石器群は、姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ層）下層に存在したものが上下移動したものと考えられる。

２点の石器は、チャート製で、色合い・質感が同じであり、同一個体である（第 29 図 1･2）。

１はチャート製剥片で縦 1.7㎝、横 1.3㎝、厚さ 0.35㎝、重さ 0.6 ｇである。

２はチャート製剥片で縦 0.9㎝、横 0.9㎝、厚さ 0.15㎝、重さ 0.1 ｇである。

この石器群は群馬県では、平面で５m前後の範囲で石器群の発見されることが通常であり、石器の広がりがあった可能性がある。

ＡＴ層の年代は、今まで２万４千年～２万５千年前ころと言われていたが、最近の年代観で３万年前の年代とされる研究発表がされている。

関東ローム層中から出土した石についてはすべて取り上げている。

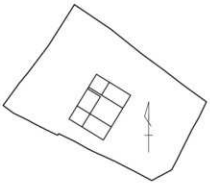
これらの石についても石材鑑定を行ったので第８表にまとめる。

石器であるチャート製の石器剥片２点の他は、次の通りである。玉髄１点、雲母片岩５点、石英４点、石英片岩２点、緑色岩１点、緑色片岩２点の合計 17 点である（写真図版６右下写真）。

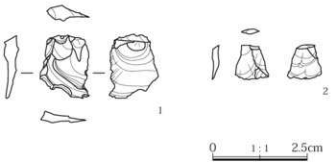
なお、これらの石群は人工的な石器ではない。

ローム中　出土自然石一覧表　（第８表）

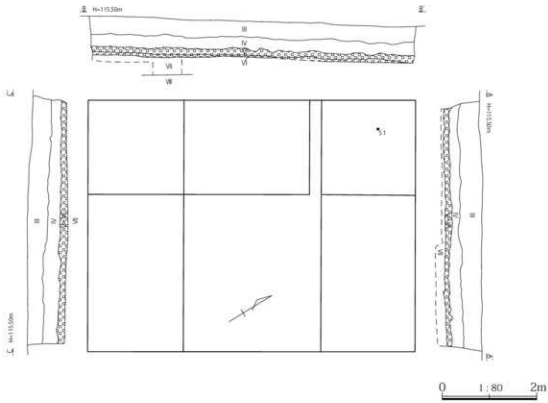
番号	縦 cm	横 cm	厚 cm	重量 g	石質	備考
1	4.8	2.9	1.1	14.4	玉髄	
2	4.4	2.9	1.4	25.9	雲母片岩	
3	2.9	2.4	1.5	12.4	雲母片岩	
4	3.0	1.8	0.6	4.1	雲母片岩	
5	1.5	2.0	1.1	2.2	雲母片岩	
6	1.1	0.9	0.3	0.4	雲母片岩	
7	2.0	0.9	0.5	1.1	石英	
8	1.6	1.2	0.8	1.4	石英	
9	1.3	1.0	0.5	0.6	石英	
10	0.8	0.7	0.4	0.2	石英	
11	2.6	1.9	1.3	4.8	石英片岩	
12	1.7	1.0	0.9	1.4	石英片岩	
13	1.2	1.0	0.5	0.4	緑色岩	
14	1.6	1.9	0.6	2.2	緑色片岩	
15	0.9	0.6	0.2	0.1	緑色片岩	



第 27 図　調査区の試掘位置図



第 29 図　旧石器時代出土石器実測図



第 28 図　旧石器時代試掘調査平面図・土層断面図

Ⅰ 耕作土
Ⅱ ローム漸移層：ローム粒子を混入締まりは弱い。古墳のマウンド下の地層であり、旧地表が残っている。
Ⅲ 黄褐色土層　：ローム層で良く締まっている。上下２層に分けられる。下半がやや黄色味が強い。黄色いパミス5㎜が点在している。なお、板鼻黄色パミスの純層は認められない。
Ⅳ 黄暗褐色土層：ローム層で良く締まっている。Ⅲ層のローム層より茶色が強い。
　　Ⅳ層の中には、部分的に炭化物が含有している。この集中が認められる個所あり。
Ⅴ 浅間－板鼻褐色軽石層：　部分的に層序が異なっている。条件の良いところでは上層に灰色の強い一定厚さでパミス層が、下層にはオレンジ色の粘質の強いパミスが認められる。一部にはこの中間に３㎝くらいの粘土層を認めることができる。上下層が逆転している場合もある。この層は上下方向に大きな動きのあることがわかる。このパミス層はＡs-室田パミス層という。これらをＢＰユニット層という。
　　姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）がⅤ層の下限に通常存在する。
Ⅵ 灰白色粘土層：茶褐色の斑点が混入、非常に粘性があり、締まりも強い。
Ⅶ 灰色粘土層　：灰色粘土層を主体に茶褐色の縦方向に伸びる幾つも筋が斑模様のように見ることができる。この層を水平に削ると日照りで起きるひび割れ状況であることが確認できた。
Ⅷ 白灰色粘土層：最下層は白色粘土層である。純粋に粘土層であり、20㎝は同一層であると確認した。その下層は未確認である。

※なお、Ⅴ層についての地層は、群馬県藤岡市北山遺跡と対比できる内容であると大工原豊氏より御教示を得た。

第４節　その他

柱穴列

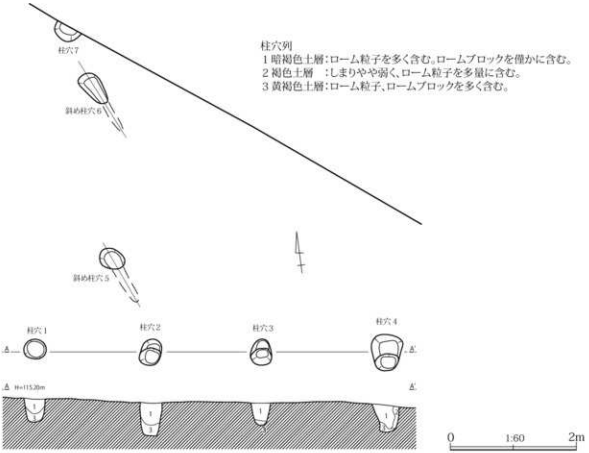
柱穴１から柱穴４の柱４本の並びは、直線で東西の主軸ラインＥ－８°－Ｓで並んでいる。

ほぼ等間隔で掘立柱建物の柱穴を推定し、柱穴１と柱穴４の柱列に直行する柱穴の検出を試みたが、その存在はなく掘立柱建物の可能性はなくなり、四本の柱穴のみの単独遺構となる。遺構としては柵跡ということになる。柱穴列の長さは６ｍであり、柱穴の心身距離は各々 1.8 ｍである。

なお、西側の柱穴１の１本を基準に東側３本は柱の掘り直しが行われている。３本とも南側に深い掘り直し穴が存在する。元々の主軸ラインはＥ－７°－Ｓである。

柱の大きさは、柱穴１は平面が円形で南北 30㎝、東西 35㎝、深さ 44㎝。柱穴２は平面が楕円形で南北 43㎝、東西 32㎝、深さ 40㎝と 54㎝。柱穴３は平面が楕円形、南北 42㎝、東西 35㎝、深さ 32㎝と 35㎝。柱穴４は平面形、南北 57㎝、東西 50㎝、深さ 46㎝と 55㎝である。

出土遺物はなく時期不明・性格不明である。



第 30 図　柱穴列平面図・同土層断面図及び斜め柱穴平面図

斜め柱穴

柵列に直行する形で２本の斜め柱穴が掘られている。手の届く範囲で調査しているが、各々あと 40 ～ 50㎝は掘削してあることをピンポールで刺して確認。人工的に掘られたものであるが、性格は不明である。

斜め柱穴５・６の大きさは次のとおりである。

柱穴５は確認面の平面形は楕円形で、大きさは東西 38㎝、南北 32㎝である。

穴の底までは調査できなかったが、調査したのは腕の長さ 70㎝でそれより、さらに 50㎝は掘り進めることができることを確認する。この穴の斜め角度は 30 度である。穴の長さは 1.2 mある。主軸方位はＮ -22°- Ｗである。

柱穴６は確認面の平面形は長楕円形で、大きさは東西 35㎝、南北 57㎝、である。
穴の底までは調査できなかったが、調査した腕の長さ 70㎝でそれより、さらに 40㎝は掘り進めることができることを確認する。この穴の斜め角度は 40 度である。穴の長さは 1.1 mである。主軸方位はＮ -25°- Ｗである。

柱穴５、６の配置は心身で 2.8 mである。北側調査区外柱穴存在の有無によっても、もう少し検討する余地が生まれる。

その他小穴を 17 個所確認しているが、すべて浅く性格は不明である。

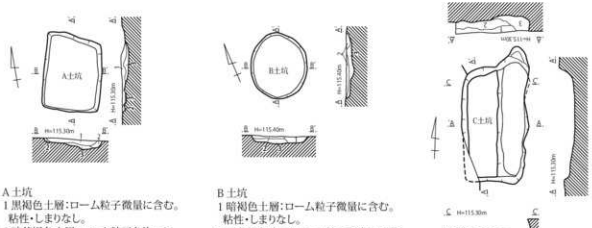
土坑

土坑はＡ・Ｂ・Ｃ土坑の３基が存在する。

土坑Ａ

土坑Ａは、４号住居跡と 66 号墳の中間に位置する。平面形は長方形で主軸はＮ -10°- Ｅである。大きさは南北 122㎝、東西 94㎝で遺構確認面は関東ローム層で確認できた。深さは 16㎝でローム層はあまり掘削していない。覆土は３層である。

床面は、関東ローム層で平らである。出土遺物は、土師器甕口縁部破片１点の出土があった。



A土坑
1黒褐色土層:ローム粒子微量に含む。粘性・しまりなし。
2暗茶褐色土層:ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりなし。
3暗黄褐色土層:ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりなし。

B土坑
1暗褐色土層:ローム粒子微量に含む。粘性・しまりなし。
2黒茶褐色土層:ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりなし。
3暗黄褐色土層:ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりを有する。

C土坑
1暗褐色土層:ローム粒子・ロームブロックφ１～2cmを僅かに含む。
2暗褐色土層:１層より暗くローム粒子が多く含まれ、ロームブロックφ１～2.5cmを含む。
3暗黄褐色土層:ローム粒子を多く含む。しまりはゆるく粒子も均一である。

第 31 図　土坑平面図・同土層断面図

土坑B

土坑Bは、66号墳と1号住居跡との間で66号墳から西に50㎝離れている。遺構確認面はローム層より上層の暗褐色土層中であり、平面形は円形で大きさは東西90㎝、南北104㎝、深さ14㎝である。

床面は関東ローム層で皿状である。覆土は3層である。

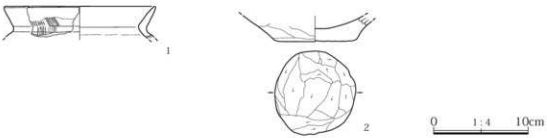
出土遺物はなく、時期は不明である。

土坑C

土坑Cは、4号住居跡と重複関係にある。平面形は不定形である。

4号住居跡の北東側に重複して存在し、その重複関係は4号住居跡が古く、本土坑が新しいものである。主軸は真北あり、西壁は確認できないが、現状の大きさは　東西1.1 m、南北2.2 mと1.84 mである。なお、東側には南北より大きく東壁がオーバーハングした壁が存在している。土層での明確な変化を見ることができなかったが、2つの遺構の合併形と考えることもできる。一つは東側の遺構は南北2.2 m、東西48㎝、深さ24㎝の長楕円形と認識することもできる。もう一つの土坑は、平面形が南北1.84 m、東西は60㎝である。

出土遺物は、土師器破片20点、石器剥片1点、鉄破片1点の出土があったが、4号住居跡の出土品をC土坑出土遺物として処理されているものが見られた。鉄破片は鉄製品の形状を示していない非製品である。時期は不明である。



第32図　土坑出土土器実測図

A土坑　出土遺物観察表（第9表）　　( ) 推定数値　[ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	甕	覆土	(16.0)	-	[3.2]	砂粒	良好	橙	頸部に口縁側からは斜方向頸部に縦方向のハケ目が施される。	口縁部破片

C土坑　出土遺物観察表（第10表）　　( ) 推定数値　[ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
2	甕	覆土	-	8.5	[3.0]	砂粒	良好	橙	底部のヘラケズリ整形が顕著。	底部のみ

第５章　自然科学分析

長沖古墳群久保地区Ｄ地点１号住居跡出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長沖古墳群久保地区Ｄ地点では、炭化材を伴う古墳時代前期の１号竪穴住居跡が検出されている。１号住居跡は、以前にも南側の調査が行われており、垂木などと考えられる炭化材が住居の中央から外側に向かって放射状に検出され、火災住居跡であることが確認されている。今回の住居北側の調査では検出した炭化材は、南側と同じく放射状に伸びる炭化材が出土している。

本報告では、木材利用を検討するために、炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、１号住居跡から出土した炭化材６点 (炭１～ 6) である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を第 11 表に示す。炭化材は、広葉樹２分類群 (ネムノキ・ムクロジ) に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

樹種同定結果 （第 11 表）

遺構	時期	試料	状態	種類
1 号住居跡	古墳時代前期	炭 1	破片	ネムノキ
		炭 2	破片	ネムノキ
		炭 3	破片	ネムノキ
		炭 4	破片	ムクロジ
		炭 5	破片	ネムノキ
		炭 6	破片	ネムノキ

・ネムノキ（*Albizia julibrissin* Durazz.）
マメ科ネムノキ属

試料は全て年輪界で割れて、板目板状の破片になっている。環孔材で孔圏部は３～５列、孔圏外でやや急激に径を減じた後、単独または２～３個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～２細胞幅、１～ 20 細胞高。

・ムクロジ（*Sapindus mukorossi* Gaertn.） ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって経を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～ 40 細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

4. 考察

1 号住居跡の北側の床面から出土した炭化材は、炭 1、炭 4、炭 6 が住居の外側に向かって放射状に出土しており、垂木の可能性がある。炭 2,3,5 は、炭 1 の周囲から出土している。分析試料として採取された炭化材は、いずれも破片で、年輪界で割れているものも多く、元の形状・木取りは不明である。これらの炭化材は、ネムノキとムクロジに同定された。

ネムノキは、二次林の林縁部や水辺等に生育する落葉高木で、木材はやや軽軟で強度と耐朽性は低いとされる。ムクロジは、山地・丘陵地等に生育する落葉高木で、木材はやや重硬な部類に入る。

出土状況と樹種同定結果をみると、炭 1,2,3,5 は、狭い範囲に集中し、樹種 (ネムノキ) および軸方向が同一であることから、元は同一部材に由来する可能性がある。一方、同じネムノキに同定された炭 6 は、間に炭 4 を挟んで炭 1,2,3,5 から 1m 以上離れており、軸方向も異なることから別部材と考えられる。したがって、1 号住居跡北側から出土した炭化材は、3 部材に 2 種類が利用されたことが推定される。

伊東・山田 (2012) のデータベースによれば、本遺跡周辺では古墳時代初頭の住居跡出土炭化材の樹種を明らかにした例は認められない。比較的近い時期の資料としては、大久保山遺跡Ⅳ区（本庄市）の弥生時代後期とされる住居跡から出土した垂木などと考えられる炭化材がクヌギ節とコナラ節に同定されている。一方、埼玉県内の古墳時代初頭～前期の住居跡出土炭化材の樹種を同定した例をみると、尾ヶ崎遺跡および風早遺跡 (旧庄和町)、中原後遺跡 (浦和市)、富士前遺跡 (志木市) でクヌギ節やコナラ節を主体とする結果が報告されており、大久保山遺跡の弥生時代後期の資料と同様の木材利用がみられる。なお、羽折遺跡 (鶴ヶ島市) では、カエデ属、コナラ節、カキノキ属が確認されており、県内の同時期の資料とは異なる木材利用傾向が確認される。

今回の結果は、上記のいずれの遺跡とも木材利用傾向が異なる。ただし、住居北側の 3 部材のみの結果であり、屋根を支えるのに強度が必要なことを考慮すれば、住居全体では他遺跡と同様にクヌギ節・コナラ節等の強度が高い木材を利用していた可能性もある。住居南部の炭化材は残っていないことから、周辺地域で同時期の建築部材の木材利用について調査例を蓄積し、その中で検証していくことが重要である。

（高橋　敦）

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 ,66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

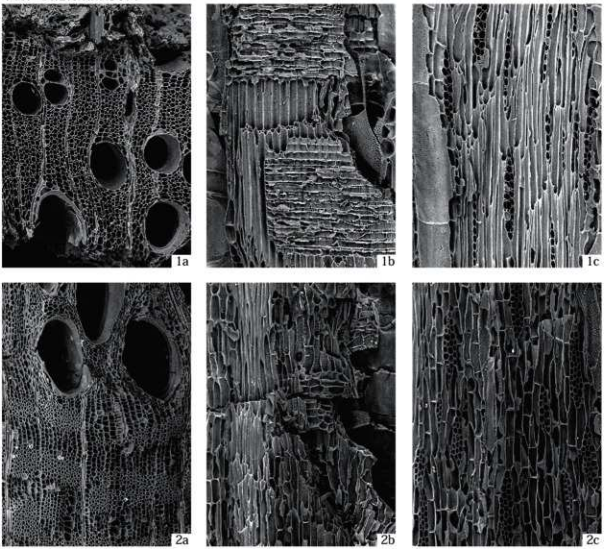
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久 (編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

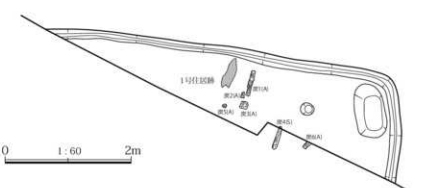
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA *List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］

図版　炭化材顕微鏡写真



1.ネムノキ(SI-1:炭1)
2.ムクロジ(SI-1:炭4)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c



試料番号の後の( )内がAはネムノキ、Sはムクロジを示す。

第 33 図　1 号住居跡における炭化材の出土状況と樹種

第６章　まとめ

本遺跡からは、古墳時代・縄文時代・旧石器時代の遺構・遺物が認められた。

○古墳時代前期の集落

古墳時代は、前期の集落遺跡が確認されている。埼玉県埋蔵文化財調査事業団の県道拡幅工事事前調査において、竪穴式住居跡がＤ区で２軒、Ｅ区で３軒、第７次調査で３軒と本調査で７次調査の１号住居跡の未調査部分と４号住居跡で合計９軒の集落が確認された。

この集落の範囲は北西側の小河川と東南側の埋没谷部に挟まれた幅 100 ｍの台地上の範囲で集落をとらえることができ、南側は 100 ｍ位で南限を予測できる。北側にどの程度広がりを認めることが今後の課題である。また、北側の丘陵先端付近は隣接して方形周溝墓群の墓域が想定されている。

古墳時代の竪穴式住居跡は、１号住居跡１軒は典型的な焼失住居である。

４号住居跡の遺物出土状況はすべて床直遺物ではなく、屋根が崩落後に竪穴式住居跡のくぼ地に土器や石類を廃棄したものである。廃棄時期は土器類が同一時期であることから一気に廃棄したものと考える。

古墳の築造に必要な石材を大量に使うのとは違い、古墳時代前期の集落の住居内に石が多く出土している。何かの意図をもって、人為的に川から石を選定して持ち込まれている。これらの多くの石については、今後調査検討する必要があるかもしれない。

また、第７次調査において３号住居跡出土品として高坏・小形の台付甕と共に吉ケ谷式系の壺が出土している。４号住居跡も同じように在地の弥生時代後期の吉ケ谷式の系譜を引く土器がまだ残っている。同じく群馬県の弥生時代後期樽式土器が残っており、古式土師器である古墳時代前期土器（石田川式の台付甕）、東海東部の大廓式と思われる壺なども近くで出土しており、弥生時代から古墳時代への過渡期であることがわかり、これらの共存関係・交流に大変興味がもたれる。

なお、１号住居跡は焼失家屋で建築構造材が炭化している。その炭化材の樹種同定を行った結果は、ネムノキとムクロジが確認された。ムクロジは南の植物で埼玉県本庄市が北限域と考えられ、ネムノキもこの地域の樹種鑑定には発見例がない木である。このように樹種同定により、遺跡のおかれた自然環境に新しい発見もあり、具体的に総合的な社会復元ができる。

○長沖古墳群 第 66 号墳

66 号墳は、昭和 58 年度に本調査が行われ、主体部も調査されている。今回は北西部の周溝調査だけであるが、その部分が南西部周溝より幅広であり、部分的に深く掘削してある。

また、その中で周溝外側の底面から壁面を使い土坑が掘られていた。いわゆる、特異な位置に埋葬施設を持つ事例ではないかと思われるが、後期古墳には今まで発見例はない。長沖古墳群においても初めての事例である。今後の調査事例の増加に期待したい。

環状１号線建設に伴う事前調査で 66 号墳の谷をはさんで東側にある 158 号墳までは発掘調査で古墳が存在していないことが確認されている。また、県道の拡幅工事で県が調査したＣ区北側、Ｄ区・Ｅ区には古墳の存在がなかった西側の谷部分にかけては古墳の存在はほぼないことが考えられる。

このことから、西側はほぼ古墳群の限界を示しているもので、66 号墳の東隣接地は埋没谷が南北に走っており、古墳群としては完全に隔絶した状況を作っている。

今後の調査によれば北側と南西方向にまだ広がる区域を残しているが、66・65・67・159・160号墳の５基は長沖古墳群の中で小規模な支群を形成している。

○縄文時代

縄文時代の遺構は存在しなかったが、早期末から中期土器の出土があった。前期土器の中に北関東東部の茨城県方面の興津式土器の出土があった。興津式土器の特徴は二枚貝の側縁を土器面にスタンプしてギザギザ模様を縦方向・横方向に施文したものである。

縄文前期前半の植物繊維を胎土に含む黒浜式期、前期後半の諸磯Ｃ式の集合沈線で文様構成された一群、先の興津式土器、縄文中期加曽利Ｅ式土器が出土している。

石器としては石鏃、尖頭器、打製石斧、くぼみ石、多孔石などが出土しており、近くに遺構があったことが窺える。

黒曜石剥片の出土が多いが、石製品の出土がなかった。

但し、チャート製のポイントの出土があることから、縄文時代草創期から旧石器時代の後期後葉の時期の文化層があったことも考えられる。

○旧石器時代

旧石器時代は、主要地方道秩父・児玉線の拡幅工事に伴う埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査において、本遺跡の南西 160 mの地点で黒曜石製のナイフ形石器１点の出土があった。本丘陵調査地においても旧石器時代の石器の出土が認められるかローム層中の試掘調査を行った。その結果、先のナイフ形石器とは異なった時代、ＡＴ層下（姶良・丹沢火山灰）でチャート製の小剥片２点の出土があった。石器の広がりを確認するまでには至らなかったが複数の剥片が発見された事は石器の広がりが存在した可能性がある調査であった。

この丘陵において、旧石器時代の石器の存在を明らかにできたことは、原位置で認められたことを含め最大の発見でもある。

また、ＢＰユニット層中の発見であったが、地層の乱れは大きくＡＴ層下の石器であることが指摘された。ＡＴ層下の石器は本庄市内で一番古い石器ということになる。

ＡＴ層（姶良・丹沢火山灰）の年代は、通常 24,000 ～ 25,000 年前とされている。

なお、最新の研究では※福井県水月湖の堆積層［年縞］の研究で、ＡＴ層の年代を約 30,009 年前と具体的にした研究も進んでいる（註 a）。

○その他

その他として、柱穴列と斜め柱穴・土坑が存在した。柱穴列は４穴が等間隔で直線に並び掘立柱建物を想定させたが、四角に柱が並ぶことはなかった。斜め柱穴は 30 度くらいの斜度で柱穴が 1.5 mもあり、動物の巣穴かとも考えられたが今後の資料の増加を待ちたい。

（大塚昌彦）

註

註ａ　2012 年に福井県の水月湖の湖底に堆積している土の層「年縞」が「地質学的年代決定」の世界標準となった。「年縞」とは、湖底には春から夏にかけてプランクトンの死骸や珪藻類が繁殖堆積して白い層になる。秋から冬には粘土鉱物が休積して黒い層ができる。樹木の年輪同様１年経過する毎に一対の筋が形成され縞模様が連続出来上がっている。水月湖には「縞」が７万年分残っていた。

参考文献

菅谷浩之 1980『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書 第１集 児玉町教育委員会
恋河内昭彦 1984「長沖古墳群の第７次調査」『第 17 回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
大谷　徹 1999『長沖古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 234 集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木徳雄ほか 2007『長沖古墳群Ⅶ』本庄市遺跡調査会報告書 第 14 集 本庄市遺跡調査会
鈴木徳雄ほか 2011『長沖古墳群Ⅹ』本庄市遺跡調査会報告書 第 41 集 本庄市遺跡調査会
大熊季広ほか 2002『長沖古墳群Ⅲ』児玉町文化財調査報告書 第 36 集 児玉町教育委員会
大熊季広ほか 2003『長沖古墳群Ⅳ』児玉町文化財調査報告書 第 37 集 児玉町教育委員会
大熊季広ほか 2004『長沖古墳群Ⅴ』児玉町文化財調査報告書 第 38 集 児玉町教育委員会
恋河内昭彦ほか 2006『長沖古墳群Ⅵ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第２集 本庄市教育委員会
恋河内昭彦 2008『長沖古墳群Ⅷ』本庄市遺跡調査会報告書 第 21 集 本庄市教育委員会
恋河内昭彦 2011『長沖古墳群Ⅸ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第 24 集 本庄市教育委員会
恋河内昭彦 2012『長沖古墳群Ⅺ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第 27 集 本庄市教育委員会
的野善行 2014『長沖古墳群Ⅻ 女池遺跡Ⅳ 西富田遺跡Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第 36 集 本庄市教育委員会
太田博之 2012『長沖古墳群ⅩⅢ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 39 集 本庄市教育委員会
阿部正功・大野延太郎・鳥居龍蔵 1895「秩父地方に於ける人類学的旅行」『東京人類學會雑誌』第 10 巻 第 110 號 東京人類學會
坂本和俊ほか 1990『秋山古墳群 – 庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査 - 』児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会 児玉町史資料調査報告 古代 第２集
志村 哲・大工原 豊 1988『藤岡北山遺跡』『群馬県史 資料編 1 原始古代１旧石器・縄文』群馬県 135 ～ 142 頁
利根川章彦 1994「六 東国の群集墳」『古代を考える 東国と大和王権』吉川弘文館
本庄高等学校考古学部 1975「児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」『いぶき』８・９合併号
県立さきたま資料館 1994『埼玉県古墳分布調査報告書』埼玉県教育委員会
杉崎茂樹 1989「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』８７号
塩野　博 1999「埼玉の古墳－その発掘と研究の歴史（その３）－」『埼玉考古』第 34 号
増田逸朗 1995「北武蔵における初期横穴式石室導入期の様相」『調査研究報告』第８号 県立さきたま資料館
増田逸朗 1996「模様積石室小考」『調査研究報告』第９号 県立さきたま資料館

写　真　図　版

写真図版　目次

図版１　久保地区Ｄ地点全景（北から）
久保地区Ｄ地点全景（西から）

図版２　１号住居跡　全景（北東から）
１号住居跡　炭化材・焼土・出土遺物
１号住居跡　貯蔵穴
１号住居跡　土層断面
１号住居跡　掘り方完掘

図版３　４号住居跡　遺物出土状況
４号住居跡　土層堆積状況
４号住居跡　完掘状況
４号住居跡　掘り方完掘状況（西から）
４号住居跡　掘り方完掘状況（北から）

図版４　66 号墳周溝内遺物分布状況（西から）
66 号墳周溝内遺物分布状況（北東から）
66 号墳周溝完掘状況（西から）
66 号墳西側周溝土層断面状況（北から）
66 号墳周溝内発掘調査風景

図版５　66 号墳周溝内土坑
66 号墳周溝内土坑土層断面
66 号墳周溝内土坑
66 号墳周溝内土坑
66 号墳周溝土層断面
66 号墳周溝内土坑土層断面
66 号墳北側石集積個所
66 号墳北側石集積個所

図版６　ローム層標準土層
ローム層中石器出土状況
ローム層中カーボン集中個所
ローム層中石器出土状況
ローム層中発掘調査風景
Ⅶ層中の土層断面と平面
ＡＴ層下出土剥片　(1/1)
ローム層中の自然石

図版７　Ａ土坑
Ｂ土坑
Ｃ土坑
柱穴列跡
柱穴列と斜め柱穴
柱穴４
斜め柱穴５
斜め柱穴６

図版８　４号住居跡出土土器

図版９　１号住居跡出土土器
Ａ土坑出土土器
Ｃ土坑出土土器
66 号墳周溝出土土器
表採埴輪片
66 号墳周溝出土土器
４号住居跡出土礫石材鑑定

図版 10　縄文時代出土土器
（38 ～ 42 貝殻復縁文）

図版 11　縄文時代出土石器

久保地区Ｄ地点全景（北から）

久保地区Ｄ地点全景（西から）

図版 2

1 号住居跡　全景（北東から）

1 号住居跡　炭化材・焼土・出土遺物

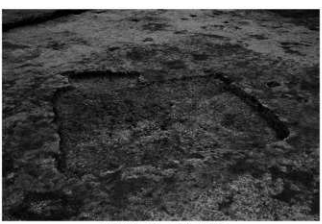
1 号住居跡　貯蔵穴

1 号住居跡　土層断面

1 号住居跡　掘り方完掘

4 号住居跡　遺物出土状況

4 号住居跡　土層堆積状況



4 号住居跡　完掘状況

4 号住居跡　掘り方完掘状況（西から）

4 号住居跡　掘り方完掘状況（北から）

図版 4

66 号墳周溝内遺物分布状況（西から）

66 号墳周溝内遺物分布状況（北東から）

66 号墳周溝完掘状況（西から）

66 号墳西側周溝土層断面状況（北から）

66 号墳周溝内発掘調査風景

66 号墳周溝内土坑

66 号墳周溝内土坑土層断面

66 号墳周溝内土坑

66 号墳周溝内土坑

66 号墳周溝土層断面

66 号墳周溝内土坑土層断面

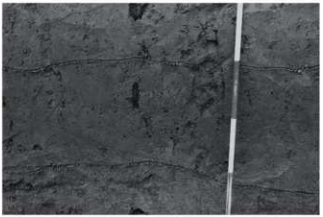
66 号墳北側石集積個所

66 号墳北側石集積個所

図版 6

ローム層標準土層

ローム層中石器出土状況

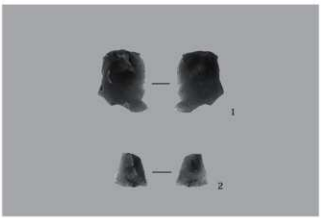


ローム層中カーボン集中個所

ローム層中石器出土状況

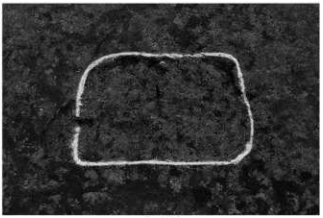
ローム層中発掘調査風景

Ⅶ層中の土層断面と平面



ＡＴ層下出土剥片　(1/1)

ローム層中の自然石



A 土坑

B 土坑

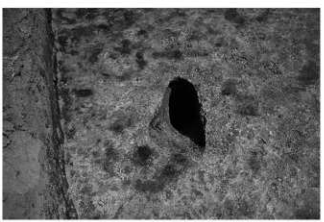
C 土坑

柱穴列跡

柱穴列と斜め柱穴

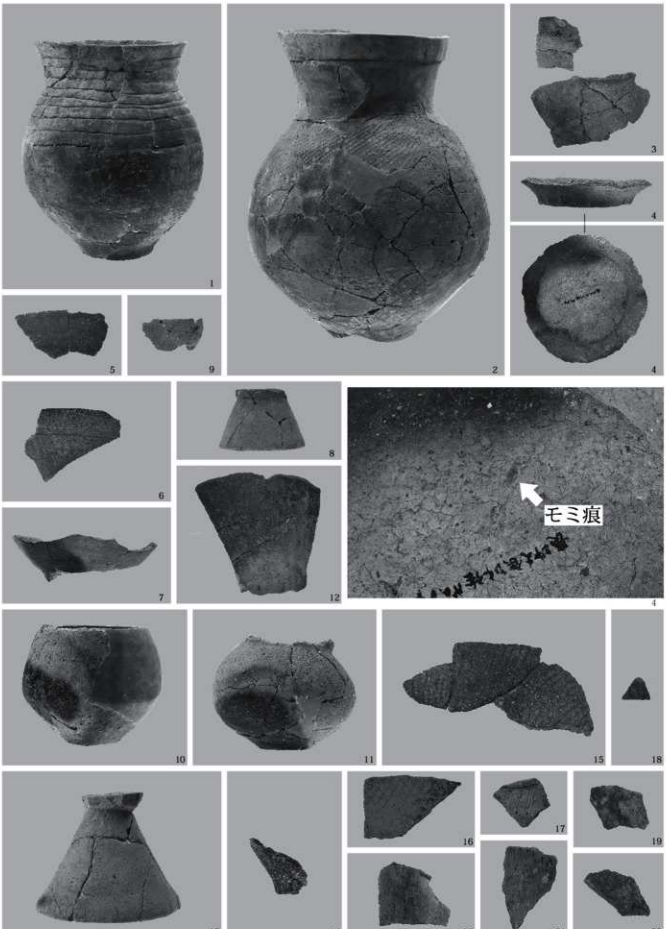
柱穴 4

斜め柱穴 5



斜め柱穴 6

図版 8



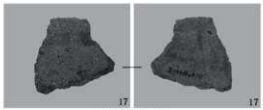
4 号住居跡出土土器

1 号住居跡出土土器

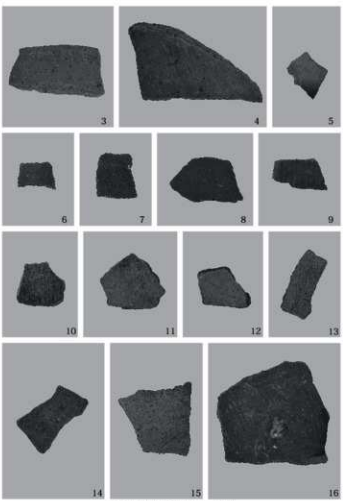
A 土坑出土土器

C 土坑出土土器

66 号墳周溝出土土器



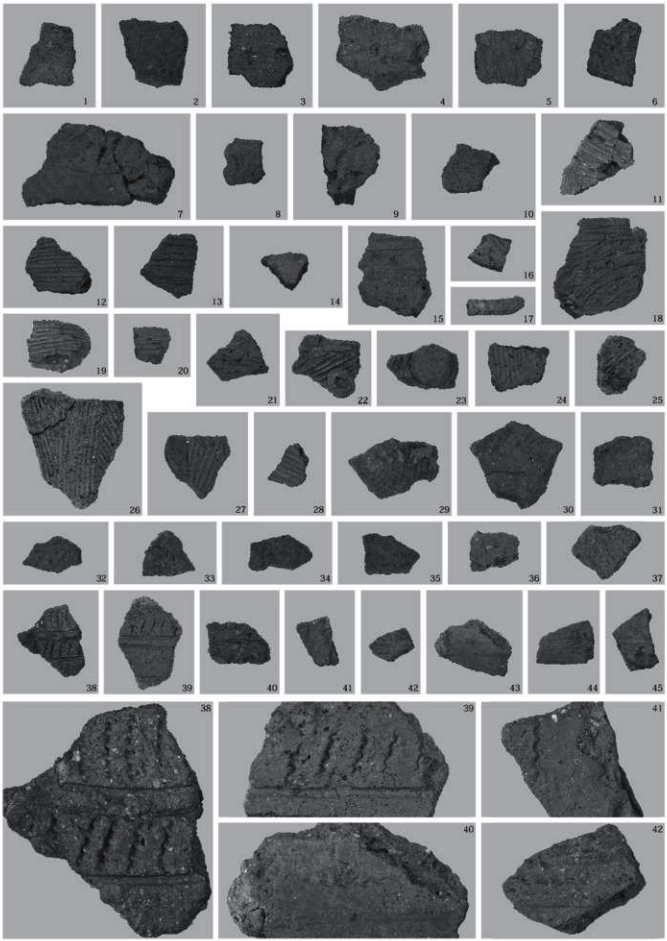
表採埴輪片



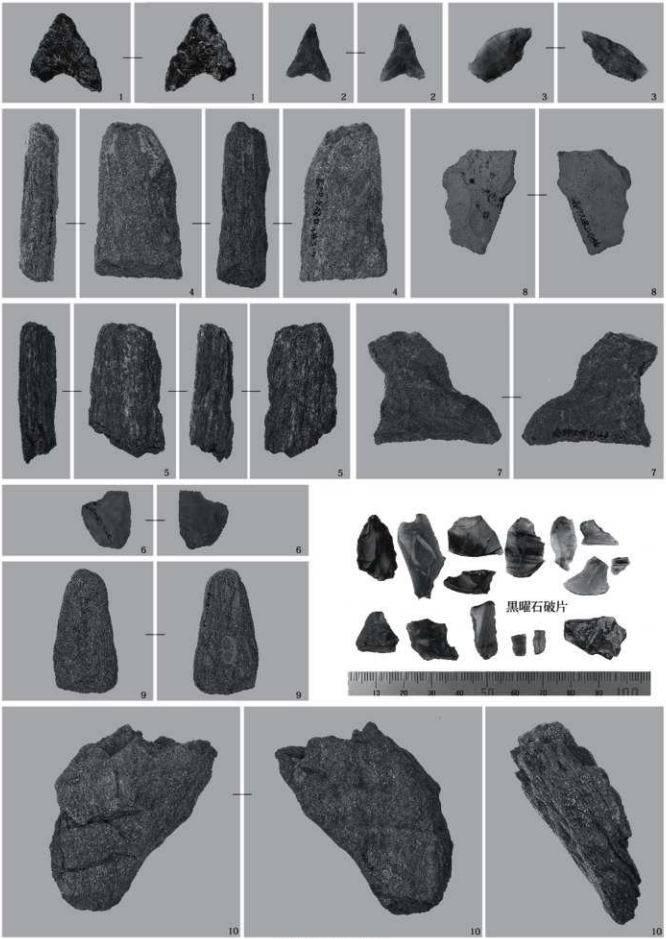
66 号墳周溝出土土器

4 号住居跡出土礫石材鑑定

図版 10



縄文時代出土土器（38 ～ 42 貝殻復縁文）



縄文時代出土石器

報告書抄録

ふりがな	ながおきこふんぐん 14　ーくぼちくDちてん・だい 66 ごうふんー
書名	長沖古墳群XⅣ　ー久保地区D地点・第 66 号墳ー
副書名	
巻次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 42 集
編著者名	大塚　昌彦　　高橋　敦
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番地３号　　TEL　0495-25-1185
発行年月日	2014 年（平成 26 年）12 月 19 日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
長沖古墳群 久保地区D地点	埼玉県本庄市児玉町 長沖 272 番 1、277 番 1・3	112119	54-300	36°10′56.5″	139°07′29.9″	2014.5.20 ～ 2014.6.20	324	店舗建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長沖古墳群 久保地区 D地点	集落	旧石器		ＡＴ層下剥片	旧石器時代ＡＴ層下石器２点出土。
		縄文		縄文時代早期末～中期土器 石鏃・打製石斧・凹石・多孔石	前期 興津式土器出土。
		古墳前期	竪穴住居　２軒	吉ケ谷式系土器 樽式系土器・東海系土器・前期土器	古墳時代前期の竪穴住居。 炭化材樹種同定でムクロジ・ネムノキと県内で類例のない樹種を特定。大廓式壺口縁破片。
	古墳群	古墳後期	古墳　１基 周溝内土坑　１基		古墳周溝調査で溝中土坑を確認。
		その他	土坑　３基 柱穴列　１列		斜め柱穴２個所。

本庄市埋蔵文化財調査報告書　第 42 集

長 沖 古 墳 群 XIV

－久保地区Ｄ地点・第 66 号墳－

平成 26 年 12 月 19 日　印刷
平成 26 年 12 月 19 日　発行

発行／本庄市教育委員会
〒 367-8501　埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号
電話　0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社